

## M-GTA 研究会 News Letter No.72

編集・発行：M-GTA 研究会事務局(立教大学社会学部木下研究室)

メーリングリストのアドレス: grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ: <http://m-gta.jp/>

世 話 人：浅野正嗣、阿部正子、小倉啓子、木下康仁、倉田貞美、小嶋章吾、坂本智代枝、  
佐川佳南枝、竹下浩、田村朋子、丹野ひろみ、塚原節子、都丸けい子、根本愛子、  
林葉子、宮崎貴久子、三輪久美子、山崎浩司(五十音順)

---

### < 目次 >

◇第7回修士論文発表会報告	.....	1
【第1報告】(構想発表)	.....	2
【第2報告】(成果発表)	.....	12
【第3報告】(中間発表)	.....	20
【第4報告】(構想発表)	.....	29
◇近況報告	.....	39
◇第3回合同研究会		
(参加募集締め切りのお知らせ)	.....	46
◇編集後記	.....	47

---

### ◇第7回修士論文発表会の報告

【日時】2014年7月26日(土)12:30～18:00

【場所】大正大学 7号館 4階 742教室

【出席者】82名

青山 真以子(国立音楽大学)・青山 由布子(京都大学)・阿曾 亮子(日本医科大学医学教育センター)・阿部 正子(長野県看護大学)・石井 奈津子(神奈川県立こども医療センター)・石川 卓弥(青山学院大学)・磯崎 京子(早稲田大学)・梅野 幸恵(武蔵野赤十字病院)・江尻 晴美(中部大学)・大石 ゆかり(埼玉)・大高 靖史(日本医科大学)・大村 光代(豊橋創造大学)・荻野 貴美子(星槎大学)・小倉啓子(ヤマザキ学園大学)・小貫 早希(聖路加国際病院)・小山 妙子(聖路加国際病院)・霍 沁宇(一橋大学)・片山 玲子(放送大学)・加藤 貴子(穂の香看護専門学校)・嘉陽田 友香(沖縄県立看護大学)・唐田 順子(西武文理大学)・菊地 真実(早稲田大学)・

橘田 康世(東洋大学)・木村 一輝(東京工業大学)・草野 淳子(大分県立看護科学大学)・倉田 貞美(浜松医科大学)・小坂 淑子(大正大学)・小島 千明(香川県立保健医療大学)・小林 敬子(大正大学)・小林 茂則(聖学院大学)・小山 道子(上武大学)・坂上 和子(特定非営利活動法人病気の子ども支援ネット遊びのボランティア)・坂本 智代枝(大正大学)・佐川 佳南枝(熊本保健科学大学)・佐々木 竹美(順天堂越谷病院)・佐々木 瞳(文京区役所)・嶋 美香(武蔵野大学)・白柳 聡美(浜松医科大学)・申 于定(東京医科歯科大学)・鈴木 祐子(国際医療福祉大学)・鈴木 優子(埼玉医科大学)・清野 弘子(福島県立医科大学)・宋 二杰(目白大学)・高津 英俊(東京農工大学)・高丸 理香(お茶の水女子大学)・滝澤 寛子(京都大学)・田島 美帆(青山学院大学)・多田 真太郎(東京医科歯科大学)・田中 満由美(山口大学)・田村 朋子(立教大学)・千葉 洋平(国士舘大学)・手塚 紀子(立正大学)・寺澤 法弘(日本福祉大学)・殿原 慶三(桜美林大学)・富田 亜沙子(東京医科歯科大学)・永峯 靖央(新潟医療福祉大学)・中村 泰之(神奈川大学)・西巻 悦子(駒沢女子大学)・二十軒 温美(兵庫医療大学)・沼上 朋恵(上越教育大学)・根本 愛子(成蹊大学国際教育センター)・根本 淳子(愛媛大学)・野尻 亜希(東京ふれあい医療生活協同組合梶原診療所)・林 葉子(お茶の水女子大学)・日高 幹代(首都大学)・平田 美紀(聖泉大学)・平間 大地(ルーテル学院大学)・藤原 あやの(聖徳大学)・牧野 公美子(浜松医科大学)・真寫 理美(青山学院大学)・松本 陽子(岡山県立大学)・三浦 恵美(東北大学)・美甘 きよ(岡山市保健所)・御薗 恵将(大正大学)・緑川 綾(慶應義塾大学)・村岡 知美(埼玉メディカルセンター)・山崎 浩司(信州大学)・山田 牧子(日本保健医療大学)・行實 志都子(神奈川県立保健福祉大学)・横田 益美(東海大学)・横森 愛子(静岡県立大学 短期大学部)・吉田 千鶴子(日本保健医療大学)

#### 【第1報告】

坂上 和子(武蔵野大学人間社会研究科 修士課程2年)

Kazuko SAKAUE : Graduate School of Human Social, Musasino University Master's 2nd Year.

#### 小児がん拠点病院のボランティアコーディネーターの役割と課題

A role and problem of the volunteer coordinator of the childhood cancer base hospital

#### 1、研究の背景

我が国の病院ボランティア活動は1968年に、淀川キリスト教病院に導入されたのが始まりであるといわれている。近年ボランティア人口はますます増加し、社会福祉協議会が把握する数でいえば、712万人にのぼる(2000年4月全国社会福祉協議会)。ボランティア活動振興に関しては、コミュニティケアへの関心の高まりとともに、1985年のボラントピア事業、1993年の全国社会福祉協議会の「ボランティア推進7カ年プラン」によってボランティアセンターの設置が進み、おもに社会福祉

協議会職員のボランティアコーディネーター配置が進んできた。一方、病院のボランティアも急激に拡大しはじめた。その背景には、1990 年代に医療をめぐる様々な変化と共に、1995 年に発足した「日本医療機能評価機構が行う病院機能評価で「ボランティアを受け入れている」との評価項目もその要因にあげられている。

しかしながら、病院ボランティアコーディネーターは、病院ボランティア活動の普及度と比べてあまり急速な伸びは見せなかった。平野優は「病院ボランティアコーディネーターの実態と機能に関する社会学的考察」の中で、「病院ボランティア活動の現場ではコーディネーターの必要性や重要性が言われながらも、その分野の研究は、まだほとんど行われていないのが現状である」と述べている。1995 年の阪神・淡路大震災が契機となり、日本においてはボランティアコーディネーターの重要性が認識されるようになった。しかし、2002 年度に行われた信友浩一らによる「病院ボランティアグループに関する全国調査」によると、病院にコーディネーターは 65%いるものの、兼任がほとんどで、専任は 2 割に満たないと報告している。

今回、調査の対象とするこども病院のボランティアコーディネーターについては、論文も報告書もほとんど見られない。小児看護の領域においてボランティア活動の論文はいくつかみられる。その内容は小児病棟における絵本の読み聞かせや遊びや学習、レクリエーションなど、療養生活を楽しませる役割とともにきょうだいの託児や付き添いの母親の気分転換や生活支援などが報告されている。

この度、研究の対象とするこども病院は小児がん拠点病院に指定された病院である。小児がん拠点病院は平成 25 年 2 月に 15 施設が指定された。小児がん医療提供体制の先駆的な取り組みとしても期待され、国のがん対策推進基本計画において重点的に取り組むべき課題の一つとして掲げられ、今後 5 年がかりで体制作りをする計画である。

小児がんは子どもの病死原因の第一位で、年間 2000～2500 人が発症する。治療には習熟した専門医が必要だが、現状は全国に 200 程度ある医療機関に患者が分散し、年間で一桁しか症例がない病院も多い。治療経験の少ない病院では適切な医療を受けられない可能性もある。このため、患者を集約化して専門医療を提供する施設の必要性が指摘されていた。2013 年度の政府予算案には緩和ケアを行う医療従事者の育成や支援体制の機能強化も盛り込まれた。今後さらに、専門医療の充実とともに患者・家族を長期にわたって支援する体制の構築が求められている。

具体的には院内学級やプレイルームの設置、さらに教師と保育士を配置すること、敷地内などに患者家族が滞在できる宿泊施設の設置などがあげられ、小児がん患者とその家族が安心して適切な医療や支援を受けられるような環境の整備が要件になっている。

この環境の整備要件に、「がんの子どもを守る会」ではボランティアコーディネーターの配置を要望している。しかし現状では、国はその要件に一切触れていない。

小児がんは乳幼児から思春期、若年成人まで幅広い年齢に発症することや、強力な化学療法や放射線療法を受けるなど過酷な治療と長い療養期間を要することも特徴で、小児がんの子どもとその家族は心理的にも社会的にも経済的にも様々な複合する困難を抱えている。

我が国の拡大家族の減少、女性の職場進出、離婚の増加といった社会的背景において、ひと

たび、子どもが小児がんのような重い病気に罹り、長期の入院が必要となったとき、患者だけでなく、付き添いの親やきょうだいを含めた多様な支援が求められ、ボランティアはいっそう重要な課題となるだろう。

とはいえ、病院は、感染やプライバシー、事故等に対する責任などのリスクが高く、簡単にボランティアを受け入れられない事情がある。ボランティアが安全に、円滑に動くためには、担い手と受け手の双方をつなぐ窓口となる職員、すなわちコーディネーターが必要と思われる。

海外においては、たとえば 2005 年に私が視察したカナダのトロント子ども病院では 388 床に 1200 人のボランティアが働いていた。ボランティアの 85%が学生で、その働きは療養環境の整備にとどまらず、ICU や緩和ケアにも関わり、病院で暮らす親子に楽しみやゆとりを提供していた。そのために、ボランティアディレクターやコーディネーター等、3 人の調整役を常勤で雇用していた。

拠点病院はこれから入院環境の整備に先駆的に取り組もうとしている段階にある。そのため、本研究は小児がん拠点病院のこども病院のボランティアコーディネーターに焦点をあて、その役割と課題を明らかにすることで、こども病院の療養環境の整備・改善について展望しようとするものである。

## 2、研究意義

### 1) 社会的意義

小児がん拠点病院はこれから 5 年の間に入院環境の整備に取り組もうとしている段階にある。15 施設のうち、こども病院は 6 施設ある。そのボランティアコーディネーターの役割を明らかにすることは小児医療の質の向上につながり、その影響は、調査対象の病院のみならず、小児がん拠点病院に指定された病院、および、我が国の全てのこども病院を含む小児総合医療施設、さらに、全国の総合病院の小児病棟にも影響を与えることが考えられる。

### 2) 学術的意義:

病院におけるボランティアコーディネーターの研究は、2004「病院ボランティア・コーディネーターの関する全国調査」があるが、これは量的な調査である。質的な調査はほとんどみられない。さらに、こども病院におけるボランティアコーディネーターに関する研究は量、質ともほとんど見られない。安立はボランティア活動が全国に普及していくためには、病院ボランティアコーディネーターによって、どのような効果があるのかを数値化できなくても、さまざまなアспектから言語化して表現していくことが必要であると述べている。

## 3、研究目的

本研究では、こども病院に入院している子どもと家族のためにボランティアコーディネーターがその役割を自覚していくプロセスに着目する。ボランティアコーディネーターはどのようなきっかけでコーディネーターに着任したか、どのような業務をしているか、どのようなことに悩み、何を問題と感じているか、また、どのような場面で喜びや生きがいを感じ、どのような工夫でやりがいのある活動

を作っていたり、それを実現していったかなど、ボランティアコーディネーターが子どもと家族の幸せのために、コーディネーターの役割を自覚していくプロセスを明らかにする。

#### 4、用語の定義

##### 1) 小児科病院(小児総合医療施設)

小児・青年の高度で包括的な医療を目的として設立され、その設立の目的にしたがって運営される施設をいう。対象は18歳未満をいう。

##### 2) 入院している子どもと家族

病気の治療で入院する子どもの心理的混乱の原因は親からの別離であり、とくに就学前の幼児で親子の分離は外傷的影響を及ぼすといわれている。「病院の子ども憲章」(病院のこどもヨーロッパ協会)には、「病院における子どもたちは、いつでも親または、親代わりの人が付き添う権利を有する」とあり「病院は親が病気のこどもに付き添えるように十分かつ適切な空間と施設を提供する必要がある」とあり、子どもの入院は家族と切り離せない関係と考える。

##### 3) ボランティアコーディネーター

本研究では「ボランティアをしたい人」と「ボランティアが欲しい人」を調整する人であり、ボランティアの受け入れに関わっている人とする。

筒井のり子は「個人あるいは個々のグループの関心や課題に個別に対応し、立場の異なるものがその違いを生かしながら対等な関係で連携し協働することが出来るように調整する」人と定義している。日本病院ボランティア協会では「ボランティアの窓口となる職員を定め、病院側と調整を図ります。コーディネーターはボランティア導入の成功のキーパーソンと言われており、重要な役割」としている。

##### 4) 病院ボランティアコーディネーターの役割

安立清史は「病院ボランティア・コーディネーターに関する全国調査」(2004)の中でその役割を、「やりがいのある活動を作っていたり、それを実現していく人」と述べている。またコーディネーターは病院とボランティアをつなぐだけでなく、ボランティアと患者さん、ボランティアとスタッフ、ボランティアとボランティアをつなぐことが本質的な役割ではないかと述べている。

#### 5、倫理的配慮

- ① 研究対象者に別紙の依頼書と本研究画書、同意書を用いて、口頭と文書で説明をする。同意が得られたら同意書に 2 部サインを得て、両方で保管する。また一度協力に同意しても協力の中止を申し出ることは自由であること、申し出を断っても何の不利益も受けないこと、同時に必要ときにはいつでも同意を撤回できることを伝え、同意撤回書と研究者連絡先を渡す。
- ② 逐語録を作成し、作成した記録は他者の目に触れないよう保管する。パソコンはパスワードを設定する。資料等は鍵のかかるロッカーにて保管する等、盗難・流失等の防止に務め、終了後は破棄する。
- ③ 音声はボイスレコーダーに録音し、メモをとる許可を得る。

- ④本研究は侵襲性は高くないと思われるが、何らかの身体的、精神的負担あるいは苦痛を受けた場合は、研究者に相談してもらい、臨床心理士に紹介するなど、対応をとるように講じる。
- ⑤病院名・氏名・住所など個人が特定されないようにし、守秘義務を厳守する。
- ⑥研究の結果は学会発表や論文として公表することについて書面と口頭にて説明をし、同意を得る。
- ⑦公表にあたって、個別の口述を引用する可能性がある場合、そのことを伝えて同意を得る。
- ⑧公表された資料を希望する場合、その用意があることを説明する。
- ⑨本研究は武蔵野大学大学院倫理審査委員会の承認を得ている。

## 6、分析テーマのしぼりこみ

現在の病院ボランティアコーディネーターは、資格があるわけではない。こども病院で働くボランティアコーディネーターは多くが他の仕事と兼務であったり、専属の場合もボランティアコーディネーターという職業についていた人ではない。たまたま着任することになったその人がどのようなきっかけでボランティアコーディネーターに着任したのか、どのような業務をしているか、どのようなことに悩み、何を問題と感じているか、また、どのような場面で喜びや生きがいを感じ、どのような工夫でやりがいのある活動を作っていたり、それを実現していったかなど、ボランティアコーディネーターが子どもと家族の幸せのために、コーディネーターの役割を自覚していくプロセスを重視する。

こども病院に入院している子どもと家族のためにボランティアコーディネーターがその役割を自覚していくプロセス

## 7、分析焦点者

小児がん拠点病院に指定された病院、および、我が国の全てのこども病院を含む小児総合医療施設、さらに、総合病院のボランティアコーディネーター

## 8、研究方法

### 1) インタビューの時期

調査期間は2014年6月から8月までの間とする。

### 2) 分析対象者の限定

小児がん拠点病院 15 施設のうち、小児医療施設 6 施設を対象に許可の得られたボランティアコーディネーター5 名である。今回、調査先を小児がん拠点病院のこども病院としたのは、小児がんがあらゆる難病の子どもの特徴を有しているからである。乳幼児期から思春期、若年成人等、幅広い年齢に発症する。強力な抗がん剤による合併症や成長発達に治療を余儀なくされるため発育・発達障害、内分泌障害、二次がんの発症などがあげられ、入院の長期化、遠方からの通院、発症年齢の幅の広さ、がんの種類によっては、知的、身体に障害をもち、3 割は死亡に至る。大人

と子どもが混在している総合病院より、子どもの入院の特徴と問題が顕著に見えることから、こども病院を選んだ。

**分析対象者** ボランティアコーディネーター5名 ( ②③④は調査済 )

調査対象者の属性および基礎データ (すべて病床数は 300 以上)								
病院名	着任年月	性別	年齢	雇用形態	専任・兼任	前職種	資格	所属先
病院①	—	—	—	—	兼任	—	—	病院所属
病院②	2011 年 6 月	男	60 歳代	月 2 回	兼任	ボランティア	—	外郭団体
病院③	2013 年 4 月	女	20 歳代	常勤 週 5 日	兼任	事務	—	病院所属
病院④	2005 年 4 月	女	70 歳代	非常勤 週 3 日	専任	看護師	看護師	病院所属
病院⑤	—	女	—	常勤	専任	—	—	病院所属

### 3) インタビューの方法

病院に電話をかけ、ボランティア担当者につないでもらった上で、ボランティアを受け入れていることを確認した。その上で本研究の主な目的と調査の概要を伝え、その後、「インタビューのお願い」を郵送し、内容を確認していただいた。1週間後に再び電話をして、承諾を得られた対象者と日時の打ち合わせをし、病院内で半構造化インタビューを行った。

コーディネーターという職種がおらず、兼任で複数がボランティア担当に関わっている場合、その中でも「キャリアが長く、全体がわかっている人」を選んでもらい、1施設に1人のコーディネーターとした。時間は 90 分以内。逐語録は A4(40×36)で、9枚～25 枚である。インタビューを実施する前に、調査対象者の属性および基礎データの用紙を送付し、インタビューをスムーズに実施できるようにした。この基礎データと逐語録を分析の資料とした。

### 4) インタビューの質問項目

- ①ボランティアコーディネーターの主な仕事について教えてください。
- ②ボランティアコーディネーターをされてよかったなあと思われたことはどのようなことですか？
- ③ボランティアコーディネーターをされて困難と思われることはどんなことですか？
- ④病院の療養環境の整備において、ボランティアコーディネーターとしてこれまで取り組んでこられたこと、さらに取り組みたいと思っていることをお聞かせください。その場合、印象に残ったエピソード

ソードや事例を一つか二つ、具体的にお話ください。

## 5、分析方法

### 1) 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA とする）

### 2) 他の研究方法ではなく、M-GTA を用いることにした理由

#### ① 社会的相互作用に関わる研究である

病院のボランティアコーディネーターは医療現場でヒューマンサービスの領域で対人援助の形をとる。その療養環境の改善にあたって期待されており、その役割は、病院とボランティア、ボランティアと患者家族、ボランティアとスタッフ、ボランティアとボランティアをつなぐことといわれ、医療と福祉の両分野にわたっている。そういったボランティアコーディネーターが抱えている問題は量的調査では適切に表現できない。

#### ② 研究対象とする現象はプロセス性を持っている

ボランティアコーディネーターが採用されるにあたっての経過とその後の活動を通して子どもと家族のためにボランティアコーディネーターがその役割を自覚していくプロセスを分析した。

#### ③ 理論生成への志向性がある

病院内におけるボランティアコーディネーターの調整メカニズムをデータにより理論化することを目指した。

#### ④ 具体的状況において応用が可能である

子ども病院におけるボランティアの組織作りや、サポート体制、病院との調整機能の充実、研修、政策提言等につながる可能性がある。

## 10、現象特性

コーディネーターが病院やボランティア、子どもと家族とやりとりしながら、子ども病院の療養環境の改善を通してコーディネーターの役割を自覚していくプロセス的特性である。

### 参考文献・参考資料

- 1、信友浩一 2005「病院ボランティアの導入とコーディネートに関する普及モデル開発とデモンストレーション」平成16年度厚生労働科学研究費補助金政策科学研究事業
- 2、安立清史(2006)「日本の病院ボランティアとコーディネートシステムの発展のための政策提言 病院ボランティア・システムの制度的な確立を」『厚生労働科学研究(政策科学推進研究事業)報告書・要旨』。
- 3、安立清史(2000)「病院ボランティア調査」『平成10年度～平成11年度 科学研究費補助金(基礎研究(C))研究成果報告書
- 4、安立清史(2006)「病院ボランティアとコーディネートとリスクマネジメントに関する総合研究—病院ボランティア導入の普及モデルと政策提言」九州大学大学院人間環境学研究院
- 5、雨宮孝子・小谷直道・和田敏明 2002 2004 『福祉キーワードシリーズ ボランティア・NPO』中央法規



- 6、田尾雅夫(1995)「ヒューマン・サービスの組織」法律文化社 194  
早瀬昇・筒井のり子(2009)『市民社会の創造とボランティアコーディネーション』筒井書房
- 7、中山博文 1998 年 4 月「急速に普及しつつある我が国の病院ボランティアの現状」『病院』57 巻 4 号 377-378
- 8、金子郁容 1992 『ボランティアもうひとつの情報社会』岩波新書
- 9、筒井のり子 1990『ボランティア・コーディネーター ―その理論と実際―』大阪ボランティア協会
- 10、ボランティア・コーディネーター研修体系検討委員会編(1997)『ボランティア・コーディネーター研修体系とその考え方』東京ボランティアセンター
- 11、山崎美貴子(2003 年)『社会福祉援助活動における方法と主体』相川書房 P20
- 12、全国社会福祉協議会・全国ボランティア活動振興センター「ボランティアコーディネーターの役割と新任研修のあり方ボランティア」コーディネーター、アドバイザー研修プログラム研究委員会(平成8年)12
- 13、日本病院ボランティア協会編(2001)『病院ボランティア やさしさの心とかたち』中央法規
- 14、内藤 美登里 「大学病院への提言―病院ボランティアとのパートナーシップ」  
中山博文 急速に普及しつつある我が国のボランティアの現状『病院』 57 1998 pp377-378
- 15、小坂淳子(2013)『フィールド調査から検証する-病院ボランティアと福祉教育』樹村房 p54
- 16、山口(中上)悦子(2003)「医療現場における集団変容プロセス―小児病棟療養環境改善を通じて―」平成 15 年がんの子どもを守る会治療研究助成金、平成 15 年関西女子短期大学所為例研究費、平成 15 年独立行政法人福祉医療機構子育て支援基金の助成による
- 17、平野優・内村公義(2005)「病院ボランティア・コーディネーターに関するコミュニティ心理学的考察―支援システムとしての可能性」『地域総研紀要』3(1), 65-76

## [SV・フロアとの主なやりとり]

### 前半

林 SV) 倫理審査委員会に出すにあたり工夫したり困難だったことは？

坂上) 倫理委員会に提出する書類を書き始めたのは1年の2月くらいで、前半はテーマを決めるまで時間をかけました。次に先行研究の参考資料や文献を集めました。倫理委員会提出書類もかなり時間がかかりました。研究の背景は資料をもとに、ひとつひとつ調べ、それを指導教授に見てもらい、提出まで3か月はかかっています。大学院に提出したものには学術的な意義の記載が欠けていた。分析方法はとりあえグラウンデッド・セオリー法としていましたが、GTA と M-GTA の違いも最初はわからなかったです。

林 SV) GTA はいろんな人が方法論を説いているが M-GTA を名乗るには当研究会で SV を受けていただくことが良いと思います。

### 後半

林 SV) 分析テーマの絞り込みで一番難しかったこと、工夫したところは？

坂上) 分析テーマが見えなかったこと。大学の倫理審査書類も1回で通らず、通ったのが5月の連休前でした。すぐに調査に行けず、2か月間悶々としていました。この間、GTA に関する本を

読み、インタビューしてから分析テーマを見つける、という方法もあることを知り、とにかく、一人目のインタビューに出かけた後に、この研究会をネットで見つけました。実際調査にいった、コーディネーターに話を聞くと、すごく生き生きとして、仕事にやりがいを感じているというのが共通にみられました。SVとのやりとりでは分析テーマは二転三転しました。最初は、「子どもと家族のQOL向上にボランティアコーディネーターが果たす重要な存在となっていくプロセス」とし、SVから「子どもと家族のQOLとはなにか」「はたす重要な存在とは何か」、この二つの定義をするように課題が出されました。定義を調べ、考えているうちにQOLの定義の範囲が大きいことに気づき、最終的に「こども病院に入院している子どもと家族のためにボランティアコーディネーターがその役割を自覚していくプロセス」としました。とくに分析テーマは重要なところで、SVが必要で一人ではここは出来ないと思います。

林SV) SVとして何を見たいのかというのを引き出してあげること、サーチライトで照らすというか。研究に足る熱意を持っている人の立ち位置がぐらついたときにどうやったら固めてあげるかを考えるのがSV。見つけるのはご本人です。

フロアから)○看護研究課程2年

研究のところで困っているのは指導教授がM-GTAをしたことがなく、インタビュー内容が分析できるデータがどうとれるのか指導を受けている。質的研究のデータとして意味がないくらいのことなのかということで悩んでいる。目的のところ、役割を自覚していくプロセスとあったが質問項目の中で半構成インタビューの中で、役割というのがカギだと思った。もうすでに役割があると思われるが対象によりさまざまにデータが得られたか具体的なところを教えてください

坂上) 私の指導教授もM-GTAをしたことはないです。先ほど言ったようにインタビューで何を聞いたら、分析できる内容が聞けるかわからず、行ってから考える、だったので、貧困なデータかもしれない。というのも、6つしかない調査先のうち、一つは断られて、5人のインタビューでどこまで説得力のあるデータが得られるかわかりません。インタビューが今は途中で、逐語録も途中で、ワークシートにおこしていない段階。なので、頂いた質問は私の方こそ誰かに聞きたいくらいです。後から理論的サンプリングっていうインタビューをする方法もあるとSVから聞いたので、ちょっと安心して、それをやるかもしれません。分析はこれからなので、具体的なことまで、お答えできずすみません。

林SV) どういう相互作用があるかを確認すること。つまり現象特性がどうなっているのかを、自分の中ではっきりさせて、インタビューガイドをつくと良いと思います。事実だけをとるインタビューでは絶対いけない。対象者の方に、なぜそうなるか、なぜそうおっしゃるのかを尋ねているかどうか、アンケート調査でも聞けるようなことだけを聞いていないかどうか、一度検証されたら良いのではと思います

坂本先生) 非常に感銘を受ました。励みになりました。ところで坂上さんのお立場はどういった立場にあるのでしょうか？

坂上) 私は保育士であり、社会福祉士であり、ボランティアでもあり、ボランティアコーディネーターという立場でもあります。インタビューするときは立場を意識することがすごく重要だと今回

よくわかったことです。コーディネーターへのインタビューは同じ立場なんで、知っている分、悪い癖が出るということ。つい自分で話をまとめたりしてしまいました。本を読んで、頭でわかったつもりでも、自覚が欠けていて、その点も、SV とのやりとりで気づかされたことでした。

司会者) はじめに方法ありきではなく、テーマが先にあって、それに合うのは KJ 法かもしれないし、M-GTA であるかもしれない。決してやりやすいから M-GTA で分析するということではなく、テーマに合っているかで考えてほしい。

#### [発表を終えてー感想]

「こうした研究会を望んでいる院生がたくさんおられるんだなあ」が、壇上に立ったときの強い印象です。指導教授が M-GTA をしたことがない、インタビューでは分析できるデータが思うように取れない、そんな発言は一人ではなかったし、兵庫県から、京都から、遠くから見えていました。自分で本を読み、必死で探して、ここに辿り着いてきた方々、私もそうでした。とにかく、フロアの質問を含めいろいろな人の発表が聞けたことがためになりました。発表が「構想、中間、成果」と分けていたのも受講者にわかりやすかったところだと思います。特に構想、中間発表者は今取り組んで格闘しているので、その焦りや辛さや何に戸惑っているかが見えて、受講生の共感を誘ったように感じました。また会費の安さには驚きです。3000 円で初年度の入会金も不要。(当日のみの参加は 1000 円)他の研究会は受講料 2,3 万、5 万以上かかるところもありますので、ありがたいです。

日本にこんなレベルの高い研究会が7年続いていること、発表会のほかに、研究会も定例で開かれて、研究で社会を変えようという研究者たちの熱意を随所に感じました。院生にとっても意義は大きいですが、SV にとっても新しい時代に挑戦する院生のテーマに刺激を受け、相乗効果の高い会になっているのではないのでしょうか。7 年、こうした研究会を支えてこられた事務局の皆様のお働きにも感謝します。

#### 【SV コメント】

林 葉子(お茶の水女子大学)

##### 1. 目的と研究テーマ、M-GTA との適合性について

坂上さんの「小児がん拠点病院におけるボランティアコーディネーターの役割と課題」は、我が国において、いまだに、確立していない病院におけるボランティアコーディネーターの役割と活動にとって、大変、意義のあるテーマだと思います。先駆的に取り組もうとしている小児がん拠点病院においても、その役割が役割として確立しているわけではないという現状のなか、奇しくも、その役割を担わなければならなくなった人々が、どのように、ボランティアコーディネーターとして、その業務を果たしているのかを研究することで、ボランティアコーディネーターの役割を規定したり、ボランティアコーディネーターを養成したりする方法を模索できるでしょう。

坂上さん自身、病児のためのボランティアを実践していらっしゃるので、ボランティアコーディ

ネーターの役割の重要さや必要性を実感していらっしゃいます。研究する人の立ち位置をしっかりと把握して、さらなる研究を進めていただきたいと思います。

この研究テーマは、ボランティアコーディネーターが、その役割を果たすようになっていくというプロセス性があり、その間に関わった病児とその家族、病院の医師、看護師など、様々な人々との相互作用や、施設的环境などとの相互作用があることは、M-GTA に適合していると思います。それらの相互作用をしっかりと捉え、プロセス中の変化のターニングポイントをつかむことができるように、インタビューを進めていってください。

## 2. 分析テーマの絞り込み

研究テーマから分析テーマへの絞り込みは、分析焦点者の特性を把握し、焦点者のどういった状況に“焦点”をあてたいのかを、坂上さん自身が認識することから始まりました。なんとなく、わかっているけれども、それを言葉にできないという状況にあって、SVに、説明することで、ご自身の目的が、だんだんに明確になっていく様子が見てとれました。

分析テーマは、インタビューを進めていくなかで、変化していく可能性もありますが、そのたびに、何を知りたいのか、データから何を知ることができるのかを常に意識して、分析テーマを決めて、分析していただきたいと思います。

発表では、絞り込みの詳細な過程を発表していただいたので、他の会員にとって、分析テーマの絞り込みの方法が良くわかったのではないかと思います。分析テーマの絞り込みがいかに大切かが、わかっていたら、M-GTA で分析するにあたっての最初の課題はクリアできたのではないかと思います。

## 3. その他

とてもエネルギーが豊富な方で、M-GTAに関する書籍もきちんと読破しており、ご自分の関心のあるテーマを分析して、役に立てたいという気持ちがとても感じられました。テーマについて熟知しているあまり、インタビューも自分自身が語ってしまう傾向があると反省していらっしゃいましたが、最初のSVのあとのインタビューは、対象者に多く語っていただくよう努力するなど、学んだことをすぐに実践できる方です。

今回は、構想発表でしたので、これから、インタビュー調査を進めて、スクリプトを作成し、分析作業に入りますが、自分中心の分析ではなく、対象者の視点にたって分析するように心がけてください。熊本での合同研究会で、分析方法をしっかりと学んでいただきたいと思います。

大変、有意義な研究テーマですので、その結果が実を結び、さらに、多方面のボランティア活動にも応用できるような実践的理論ができることを、切に願っています。

## 【第2報告】

高山 純子(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 ジェンダー学際研究専攻)

Junko TAKAYAMA : Doctoral Degree in Interdisciplinary Gender Studies, Graduate School

of Humanities and Sciences, Ochanomizu University

## 「食事作りへの参加からみる夫の家事役割意識」

Husbands' attitudes toward housework through their involvement in meal preparation

### ①問題意識の芽生え

- 女性の社会進出、共働き家庭の増加

⇒男女の家事時間の差は依然として大きい

→妻の「仕事と家庭の二重負担」(Hochschild,1989=1990)

- 男性の家事能力の低さ

→介護や定年後の生活の場面で問題

- 男性の家事参加推奨 …「カジダン(男)」、「カジメン」
- 特に料理への関心の高まり …男性向け料理雑誌、「お弁当男子」

### ②先行研究との重なりと差異

- なぜ女性が家事の中心的担い手であるか
  - ・ 特にジェンダー・アイデンティティが反映される「食事作り」
  - ・ 日本における「サラリーマンと専業主婦」モデル(落合,2000)
- 夫の家事参加を規定する要因(石井,2009)

① 対的資源差 ②時間的余裕 ③性別役割意識

★「どんな夫が家事をしているか」(規定要因)という問いに答える研究に比べ、「夫がどのように家事に参加しているか」、「家事参加をどのように意味づけているか」について明らかにした研究は少ない

#### ・ 研究の目的

- 家事の中でも特にジェンダー化された家事と言われる「食事作り」に焦点をあてる
- 夫がどのように食事作りに参加しているかについて詳細な聞き取りを行うことで、彼らの家事役割に対する意味づけを明らかにする

#### ・ 研究方法

【調査方法】半構造化面接調査(1人につき1～1.5時間)

【時期】2012年5月～10月

【対象】「週に1回以上、自宅で食事作りを行う30代～40代の既婚男性」計11名

### ③方法論(M-GTA)決定の契機

- ・ 食事作りに参加する中で、周囲（本研究においては、妻や子ども、職場など）との相互作用を経て、夫の家事役割意識はどのように深められていくのかというリサーチクエッション＝プロセス的性格
- ・ 実践的な活用へとつながる研究としたい

#### ④分析テーマの設定

- ・ まず「食事作りからみる夫の家事役割意識」という研究テーマを設定。
- ・ 次に分析テーマを「食事作りに参加していく中で夫の家事役割意識はどのように深められていくか」とした。

#### ⑤ 分析焦点者(or 分析ポイント)の設定

- ・ インタビュー当時、週に1回以上食事作りを行っている、30代～40代の既婚男性

#### ⑥ データ範囲の方法論的限定

- ・ 年代を、多くの男性が結婚や子育てを経験する30代～40代に設定
  - ・・・家事参加の必要性が高い年代
- ・ 週に1回以上自宅で食事作りを行う男性に限定
  - ・・・比較的「日常的に」食事作りを行う者を想定

#### ⑦ 現象特性の検討

- ・ 従来、女性が担っていた役割を、男性が家族や周囲との関わりを通してその役割に対する意味づけを変化させ、自らも担うようになるプロセス

#### ⑧ 対象者へのアクセスとデータ収集の展開

- ・ はじめの数人のインタビューを終えた段階では、対象者は育児期の子どもがいる方が中心となっており、「家事」と「子育て」が一体となっている語が多く見られた。そこで、「子育て」の要素のない語りととの差異もみていく必要があると考え、子どもを持たない方や、子育て期を終えた子を持つ方へのインタビューを積極的に行った。

#### ⑨ 分析ワークシート作成とバリエーションの選択(具体例を発表)

#### ⑩ 分析テーマの修正

- ・ 分析テーマ:「食事作りに参加していく中で夫の家事役割意識はどのように深められていくか」

⇒「家事に対する意識」と「食事作りの実態」の2つの視点から分析を行うことにした。

#### ⑪ オープン化における困難・工夫

- ・ 具体と抽象のバランスが難しかった  
→抽象的でイメージの湧かない概念 ⇔ あまりに具体的だと概念が増えすぎる
- ・ SV からのアドバイス  
ー概念名が「面白い」かどうか/論文を読んだ人が「ある、ある」と思えるか。納得できるか。

#### ⑫ 現象特性の再検討 当初から変更なし

#### ⑬ 収束化への移行

- ・ すべての概念が決定してからではなく、概念を作成している段階でも収束化を意識しながら分析を進めた
- ー キー概念を見つけたことでストーリーが見えやすくなった。  
「当たり前になっている感じ」という葛藤 →「振り返って気付く「妻」の役割」などを経て、「当たり前」を乗り越えることが「生活手段としての家事」につながるというストーリー  
⇒ そこで特にプロセス性を意識しながら概念間、カテゴリー間の解釈を進めた

#### ⑭ 結果図

#### ⑮ ストーリーラインの作成と結果図の修正(収束化における困難・工夫)

- ・ 一方向のプロセスにはならないという気付きにより結果図を修正
- ・ わかりやすいカテゴリー
- ・ 「意識」と「実態」の関係性がうまく見えるような結果図を作成しようと考えた

##### 結果①家事参加に至る土台

- ・・・趣味としての釣り
- ・・・幼少期のお手伝いの経験
- ・・・性別役割分業への違和感

##### 結果②家事役割の認識/イベントとしての食事作り

- ・ 「仕事との調整」をしながら、できるだけ家事に参加しようという「役割認識」
- ・ 一方で「中心は妻」という意識も  
→『『男の』こだわり』や「家族の喜ぶ顔を期待」した「イベントとしての食事作り」

##### 結果③家族との温度差/役割の再定義

- ・ 「当たり前になっている感じ」・・・家事参加は当たり前のものか、という葛藤
- ・ 「妻からの指摘」・・・片付け、作るメニューが子ども向けか 等  
→時に不満を持つこともあるが、自身の家事参加に対する気付きにもつながる

結果④生活手段としての食事作り/家事役割意識の深まり

→家族から認められていることを感じ、「家事役割意識の深まり」

- ・ 仕事にはないやりがいを見出すことも
- ・ ただし、単に「日常化」に向かうわけではなく、状況や自分の気持ちに応じて、「イベント」と「生活手段」の使い分けが行われている場合も。

**⑩ 今後の研究の発展**

- ・ 生育(成育)歴やジェンダー平等意識の影響(家事参加の土台)

⇒家庭科教育などを通じ、家事参加の重要性を早期から意識と実践の両面で働きかけることが効果的

- ・ イベント(非日常)から生活手段(日常)へ(家事役割の取得/実践面の課題)

⇒「隠れたジェンダー規範意識」をどう乗り越えるか

- ・ 家事参加継続による夫へのポジティブな影響

**[課題]**

- ✓ 対象者の偏り(高学歴層・職種) ⇒他の属性の対象者での応用可能性を検討
- ✓ 男女での比較の必要
- ✓ 本結果が「食事作り」以外の家事についても当てはまるか検討

**★研究会や勉強会での発表の回数と時期**

- ① 社会学理論に関しての勉強会 M1 前期をかけて行った(発表は3回ほど)
- ② M2の6月に質的研究方法に関する勉強会を開き、先輩より指導をいただいた

**★ゼミ発表や中間発表の回数と時期**

- ゼミでの発表 半期に1～2回
- 中間発表
  - 第1回 … M2の4月  
→分析方法や研究テーマの絞り込みに関して指摘を頂いた
  - 第2回 … M2の9月  
→妻との関係性など、家族の相互作用を分析に盛り込むよう指摘を頂いた

**★指導教員による研究指導の回数と時期**

- ・分析方法決定 ⇒ 2012年9月末頃
- ・1カ月に1回のペースで指導面談
- ・12月20日頃:最終指導面談(以降はメールにてやりとり)
- ・1月9日:修士論文提出



### ★執筆開始の時期

- ・ 目次、序論:11 月 (M2)・・・先行研究部分で苦戦(反省)
- ・ 方法:11 月 (M2)・・・書き進めやすかった
- ・ 結果:12 月 (M2)・・・もともと難航
- ・ 考察、結論、文献:12 月～1 月 (M2)

### ※題目最終決定の時期

M2 の 1 月 (M2 の 4 月に提出したものを論文提出間際に題目変更)

### 主要参考文献

- ・ DeVault,M.L., 1994, “Feeding The Family: The Social Organization of Caring as Gendered Work”, The University of Chicago Press.
- ・ 船津衛, 1976, 『シンボリック相互作用論』 恒星社厚生閣.
- ・ Hockschild, A.R., 1989, “The Second Shift: Working Parents and the Revolution at Home, Viking Penguin. (=1990, 田中和子訳『セカンド・シフト : 第二の勤務—アメリカ共働き革命のいま』朝日新聞社).
- ・ 石井クンツ昌子, 2009, 「父親の役割と子育て参加—その現状と規定要因、家庭への影響について」『季刊家計経済研究』81:16-23.
- ・ 木下康仁, 2003, 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂.
- ・ 落合恵美子, 2000, 『近代家族の曲がり角』角川書店.
- ・ 山田昌弘, 1994, 『近代家族のゆくえ—家族と愛情のパラドックス』新曜社.
- ・ 大和礼子, 1995, 「性別役割分業意識の二つの次元 — 「性による役割振り分け」と「愛による再生産役割」 — 」『ソシオロジ』 40(1):109-126.

### 【スーパーヴァイズを受けての感想】

まずは今回スーパーヴァイズを引き受けて下さった小倉啓子先生に深く御礼申し上げます。修士論文執筆中は M-GTA という分析手法を理解すること、何とか修士論文を形にすることにいっぱい、いっぱいでした。おかげさまで無事修士論文を書き上げることはできましたが今回このような機会を頂き、論文執筆から時間を経て、少し距離を置いた状態で改めて論文に向き合えたのは非常に良い経験でありました。

小倉先生のスーパーヴァイズでは発表資料の 1 枚 1 枚に、「なぜそういう結論になったのか」、「どのような気付きがあったか」などの問いかけを下さいました。そのアドバイスやご質問に応えようとあれこれ思考を巡らせたことで、より自分の考え、結論がくっきりと浮かび上がるような感触がありました。SV がなくても、常に自分自身の思考に問いを投げかけ、研究を掘り下げていくことの重要性を認識しました。

もう一つ、今回学んだことは研究者としての姿勢です。小倉先生からは発表会当日、「本研究の社会的意義」と「研究する人間」についてご質問をいただきましたが、この 2 つはいつでも即答できな

ければならないものだと気付かされました。研究をしていると目の前のことにとらわれたり、「自分は何をしているのだろう」という思いが頭をよぎったりしますが、「何のための研究か」、「自分は何者か」という原点に立ち戻ることで、常に前向きな気持ちで研究と向かい合えるのだと思いました。それ以外にも小倉先生からは、概念名に対するご指摘やタイトルの付け方など非常に実践的なアドバイスもいただくことができました。発表直前まで、さらには発表を終えた後にもたくさんのアドバイスを下さり、本当にありがとうございました。

#### 【発表を終えての感想】

フロアからは主に、研究内容に関するご質問・ご意見と修士論文執筆を書き上げるまでについてのご質問の2種類をいただきました。前者に関しては、子どもの有無が夫の家事参加に影響を与えるのではないかとご指摘などをいただき、これから投稿論文を執筆するために再度データを分析したいと思っている私にとって大きなヒントとなりました。後者については、審査会でどのような質問があったか、分析対象者の少なさをどのようにカバーしたのか、などのご質問をいただきました。ご質問にどの程度お応えすることができたか不安ではありますが、少しでも今後修士論文を書く皆さまのご参考になれば幸いです。

今回の発表を終えて、修士のうちに他大学の院生の方や他専攻の方との意見交換の機会を多く持たなかったことを反省いたしました。今後は研究会への参加等を通じ、視野を広げ自分の研究にも活かしていきたいと強く思います。

このたびは貴重な発表の場をお与えいただきまして、まことにありがとうございました。

#### 【SV コメント】

小倉啓子(ヤマザキ学園大学)

##### 1. 研究の社会的意義

高山さんは就業分野では男女共同参画が進む一方で、女性と男性の家事時間には大差があり、家庭内での共同参画は進んでいない現状、また、若い男性の家事に対する関心の高まりがみられるなど男性と家事をめぐるあい矛盾する現象に着目し、男性の家事への意識や実践の様相を詳細に把握する必要があるとの問題意識をもたれたようである。将来は、ますます男性が育児・家事・介護を担う可能性があるので、本研究のテーマは男女役割や家族関係、教育の今後のあり方を考えるうえでも社会的な意義は大きいと考える。

##### 2. M-GTA に適した研究か

①分析テーマは「食事作りに参加する中で、周囲(本研究においては、妻や子ども、職場など)との相互作用を経て、夫の家事役割意識はどのように深められていくのか」ということである。食事作りに対する意味づけと実際の食事作り行動は同時平行してダイナミックに変化していくと考えられるから、そのプロセスを捉えるには M-GTA は適切な方法と考えられる。

- ②理論的立場として、シンボリック相互作用論的見地からの役割理論を援用されており、理論的立場が明示されている。
- ③スーパーバイザー(臨床心理学)の領域からみると、食事作りについての家族関係を、家族システム理論で捉えることも出来ると思われる。理論的には多世代間の影響関係、コミュニケーションのあり方、家庭内パワーなど家族の歴史や世代間関係、ジェンダーなど多様な相互作用が理論化されているので興味深のではないかなと思われる。
3. 論題について: 論題「食事作りへの参加からみる夫の家事役割意識」は、現時点での実態把握を目的にした研究のように感じる。現意識とそこに至るプロセスを明らかにするのではないかと考えるが、なぜ、「役割意識」になっているのか疑問が残る。
4. 分析焦点者: 発表会の発表時に、協力者の子ども、子育て経験の有無は問わないことにした理由を話していただいた。子どもの出生は意識変化の重要な契機ではないことにインタビューの途中で気付いたから、とのことだったが、私には意外であった。子どもが生まれ、夫が妻の負担の重さに気づき、負担軽減のために食事作りをするようになることも多いのではという疑問はどうしても残ってしまう。
5. 現象特性: 従来、女性が担うと考えられていた役割を、男性が家族との相互作用や実際にその役割を取ることによって、役割への意味づけを変え、自分から担う姿勢になっていく、ということだろうか。「従来、女性・妻が担うと考えられていた役割を男性・夫が担う」ことは、逆のパターンでもいろいろみられる。主夫・男性の看護師や保育士、介護士、女性の重機の操作、警備員な職業などである。このようにみると、本研究のテーマは、キャリア形成、人生設計にもかかわる重要で普遍的な現象を扱っていると考えられる。
6. 概念・カテゴリー・プロセス
- ①分析ワークシートの理論的飽和化の例: ワークシートのレベルでの理論的飽和化について概念‘性別役割的分業への違和感’を例にして検討する。違和感をもった場面として、①パーティの時、キッチンで働くのは女性ばかりだったこと、②「男の子はそういうことをやるべきではないという空気」という社会的な風潮があること(逆差別とも感じているようだ)、③「『女に負けるな』とサッカーの監督から言われてきた」勝ち負けで男女の在り方を捉える指導を受けたことが例示されていた。このように‘違和感’もった年代や場面が多様であるので(他にもあるかもしれない)、分析ワークシートでレベルでの理論的飽和化はなされたと考えられる。他の概念も、同様のチェックをしてあるものと考ええる。
- ②概念名の明確さ:
- \* ‘当たり前になっている感じ’は、夫にとって葛藤を感じていないニュートラルな状況であるかのように受け取られるのではないかな。夫が感じているネガティブな感情、認識が伝わる概念名にしたほうが、夫の状況がわかりやすいのではないかな。
- \* ‘振り返って気付く「妻」の役割’とすると、振り返るのは、単に頭で考えてわかったのではなく家事の、実体験をして気付いたという経緯が見えにくいと思う。

\* ‘これまでの経験’や‘結局は自分’は、当たり前のことであるし、その概念から夫の認識や感情などを想像することは難しい。‘これまで経験’の中身を把握し表現することが必要と思われる。

\* カテゴリー[家事役割意識の深まり]は、[深まり]には違いないが、夫のにとってはもう少し多様、多層的で、生活や家族・仕事の関係を見直す複雑な経験だったのではないか。筆者の記述にもあるように、「夫は家事を日常的に行うようになることで「妻のため」、「子どものため」、「自分のため」といった多様な意味づけを獲得し、家事役割が自分にとって単なる「義務」ではなく、重要なアイデンティティの一部となるということが示唆された」のであり、本研究の到着点でもあるから、「深まり」の中身が反映されたカテゴリー名もあるように思う。

7. プロセスについて:「食事づくりに参加していくなかで夫の家事役割意識はどのように深まっていたか」を捉えようとするならば、スタート地点の行動から、どのように現状にまで変化したのかを把握する必要がある。出発点はどこなのかが、やや曖昧な感じを受ける。

おわりに

理論的立場が明確で、社会的にも意義があり応用範囲も広いテーマを設定されている。

M-GTA を有効に適切に活用された研究と思うので、今後の研究成果を期待したい。

### 【第3報告】

大高 靖史(日本医科大学 精神医学教室・筑波大大学院 M2)

Yasushi OTAKA : Department of Neuropsychiatry, Nippon Medical School)

### 自殺未遂者のリカバリープロセスに関する研究

Healing and recovering process after suicide attempt.

**研究背景:**わが国では、平成 10 年以降全国の年間自殺者数(既遂者)は 14 年連続して 3 万人を超えて推移し、近年若干の減少傾向が見られるものの依然として高い水準が続いている。国は、平成 18 年に「自殺対策基本法」を成立させ、さらに翌 19 年、自殺対策を進めていく際の具体的指針となる「自殺総合対策大綱」を定めた。それらを基に、各自治体や医療機関、各種相談機関等の施設レベルで多様な対策が講じられ、まさに国を挙げて自殺を防ぐための種々の取り組みが行われているところである。

こうした動きと並行して、「自殺がいかに発生するか」、または「自殺行動をいかに防ぐか」について、多くの調査研究に基づき検討がなされてきている。例えば、自殺を様々な背景因子が複雑に絡み合った結果生じる、「複雑事象」として理解することを提案する立場があり、具体的には、これまでに指摘されてきた自殺の危険因子(精神疾患、経済問題、家族間不和など)は、それ自体単独で自殺

が生じるわけではなく、複数の心理社会的問題が複合的に絡み合った結果発生するとされる。同様に、Mann ら(2007)は、数多ある危険因子相互の関係について、それらを素因(遠位因子)とストレス(近位因子)に分けて理解することを提案し、自殺行動に至るプロセスの説明を試みている。さらに、自殺未遂者の再企図予防に有効な介入法を探る目的で、認知行動療法など心理療法、ケースマネジメントの自殺再発予防における有効性を RCT によって検討した研究は散見される。

上記のように、「自殺がいかに発生するか」、または「自殺行動をいかに防ぐか」といった、発生予測の要因と介入法の有効性について検討された研究はこれまでも多く見られるが、患者が「いかに回復していくか」という、患者の自殺企図後回復に至る経過に着目した研究は少ない。医療機関をはじめ、福祉、司法、教育等の領域で実践される自殺再発予防の臨床においては、支援者は患者の自殺行動が起きてしまった後に彼らとかかわりを持ち、その回復のプロセスがいかに進んでいくか、また如何にかかわる必要があるか、ということが主な関心となる。しかし、患者が自身の問題をいかに解決し、その間周囲といかなる相互作用がなされていたかを具体的に検討を行った研究は、わずかに Chi ら(2013)、Bergman(2009)の試みが見られるのみである。Chi らは、自殺企図の経験のあるうつ病患者を対象にインタビューを行い、定性的分析によりそのリカバリーのプロセスについて理論生成を行い、治癒とリカバリーのためのステージ理論(具体的には①【目醒め *self-awareness*: 自分自身が背負う責任への気づきと、死に対する恐怖】、②【関係性の活用 *the inter-relatedness of life*: 専門家や友人、家族からサポートを受けることの必要性への気づき】、③【関係の循環 *the cyclical nature of human emotions*: 心理的に不快で有害なストレスと再び対峙する】、④【適応 *adjustment*: 自身特有の感情の発見と保持によって適応行動のパターンを変容させ、ストレスから注意を逸らし、現実が目が向けられるようになる】、⑤【受容 *acceptance*: 現実生活の受容と、自身の人生に注力するようになる】といった循環的モデル)を提唱した。しかし、著者による記述にみられるように、対象をうつ病患者に限定していること、さらに文化的社会的背景が異なる風土で施された研究の結果であることから、臨床現場で応用していくことには制約が伴い、かつ適用できる範囲が限定的な知見であると考えられた。

自殺者の背後には 10-20 倍の数の自殺未遂者の存在が推計されており、今なお高止まりを見せるわが国の自殺問題の現状においては、様々な領域で自殺未遂者と現場で対応する専門家の存在が考えられ、かつそれら人材の養成に関しても社会的要請がある。このような患者の回復の過程の概念化を試みた報告についてはわが国では皆無であり、自殺未遂者の個別的支援や、効果的な対策を講じる際の一資料として提示する必要性が高いのではないかと考えられた。

#### 研究する人間としての背景:

発表者は総合病院付設の救命救急センターにおいて、入院となった自殺未遂者と関わることをこれまで多く経験し、中には数年単位でフォローアップを続けた患者も居た。そうした臨床を行う中で、時には「今まさに自殺の再企図をしてしまった。どうしたらよいか」、とか、「死にたくて高いところに今立っています」といった、患者からの緊急の電話を受けることも何度もあった。

正直を申して、臨床的にかかわりを持ち始める前は、自殺未遂者という対象に対して私自身とても

不安を感じていたように思う。その不安とは、たとえば「私のかかわりでまた目の前の対象者を自殺につき動かしてしまったらどうしよう」とか、「今はニコニコして話をしてくれるけれども、次面接する時まで本当に生きていてくれるだろうか」といったもの、あるいは、「自分は医療の提供と問題解決のためのケースマネジメントの介入を行っているけれども、自殺を図ったこの人たちに対していったい何が出来るのだろうか」、または、「再び生きていこうと前向きに回復していつてくれる」なんてことがあるのだろうかといった迷いがあった。

支援者の側の私は、患者さんを何人かを担当していくうち、支援の手ごたえを感じる経験をしたリ、実際に良くなっていく患者さんを目の当たりにするうち、そういった不安が少しずつ減っていったように思う。私は、このような経験から、対象者の回復に至るプロセスに関する理論を提示し、支援の際に役立つような視点を提供したいと考えている。

## 研究目的:

自殺企図後、一定期間経過した者を対象に面接調査を実施し、その回復の過程で対象者の内外で生じた変化について概念化し、対象者の回復のために必要なものを定性的に明らかにすることを目的とした。

## 研究発表

### 1. なぜ M-GTA を活用し、他の方法論を活用しなかったのか\*

本研究では、以下の点から、M-GTA が最適であると考え、採用した。

#### 1) 社会的相互作用を扱う

本研究では、自殺未遂者の(自殺企図をした結果)退院後の生活状況における、自殺未遂者と周囲の他者との社会的相互作用をとらえようとしている。

#### 2) 研究しようとしている現象がプロセス的性格を持つ

本研究では、自殺未遂者が退院後、自身の抱える問題と向き合い、さらに周囲の他者との相互作用を通じて徐々にリカバリーしていると仮定する。

#### 3) 理論を生成し、実践的活用を目指す

研究によって得られたモデルによって、様々な領域で自殺未遂者の支援を担う専門家(特に個別支援を行う専門家を想定している)が、実際の支援を提供していく際の有益な視点を提供できる可能性がある。具体的には、地域保健を第一線で担う行政保健師や、個別的支援を提供する心理臨床家、または心理社会的問題に関するケースマネジメントを担っているソーシャルワーカー等が、クライアントに直接支援を展開していく際に有益となる理論を生成することを目指す。さらに、前述のように、現場では既に多くの実践者が居り、応用者の存在も想定できる。応用者としては、発表者の所属機関と連携事業を行っている自治体の行政保健師や、自殺再発予防の臨床家を想定しており、後者が多く参加する学会での発表なども予定している。

## 2. 研究テーマ\*

自殺未遂者のリカバリープロセス

## 3. 分析焦点者\*

自殺企図後一定期間安定して経過している自殺未遂者

## 4. インタビュー項目

### i) 基礎情報

①自殺企図からの時間の経過 ②再自殺企図の有無 ③現在の居住環境, 経済状況 ④精神科診断

### ii) インタビューガイド

#### 1) <希死念慮の再燃の有無> (時期, 回数, 頻度)

“退院してから今までに, 死んでしまいたいと思うことはありましたか”

#### 2) <現在のストレス・契機の確認>

“①退院してから今までに/②今現在, 強くストレスに感じていることはありますか(それで死んでしまいたいと思うことはありますか?)”

#### 3) <ストレスマネジメント方略とその変化>

“ストレスに感じる事が有った時, それに対してどのような対応を行っていますか?”

#### 4) <必要であった支援の内容>

“退院時に抱えていた悩み(契機・問題)に対して, どのように解決しましたか? 利用, または相談していた機関/人を教えてくださいか?”

“(利用した/しない, 存在する/しないに関わらず)どのような相談機関があると良いと思いますか?”

#### 5) <自己肯定感の変化>

“あなたご自身について教えてくださいたいのですが, ご自身への態度(評価)について, この間変化はありましたか? (たとえば, 自信とか, そういったことでの変化はありましたか)”

#### 6) <社会的役割の変化>

“職業に就いたとか, 家庭の役割が出来たとか, 「あなたがしなくてはいけない」といった, (例えば責任を伴うような)役割の変化はありますか?”

#### 7) <死に対する態度>

“死ぬことについて, 今はどうお考えですか? 前回の自殺企図以降の変化はいかがでしょうか?”

## 5. データの収集手続きと範囲(方法論的限定)\*

### i) データの範囲

2009.1-2013.6 に日本医科大学附属病院(以下, 当院とする)高度救命救急センターに自殺

企図の結果入院となった者のうち、下記の適格性を備えた者を対象とした。(目標対象者数は10～20名とした。)

適格性の基準:

- ・ 明確に自殺の意図を持って自傷行為に及んだ結果、入院となった者
- ・ 現在も当院外来通院中の患者である者
- ・ 主治医により、面接調査の実施が可能と判断された者

＊ 回収資料②【表-対象者の基本属性】

## ii) データの収集方法

適格性の基準を満たした対象者に対し、外来受診時に主治医より研究内容の説明を行い、発表者がその内容を補足した。書面による説明に対し、同様に書面にて同意が得られたものに対し、外来診察の前後で面接調査を実施した。調査は、自殺企図当時の状況を記録した診療録の情報を元に、入院のエピソードから退院後、現在に至るまでの状況について対象者に回想してもらう形で実施した。面接時間は、40-70分程度であり、面接時の会話をICレコーダーにて記録した。調査実施に伴い想定された有害事象(自身の過去の振り返りを通して被る精神的苦痛、希死念慮の再燃等)に常に注意をしながら実施し、有害事象が発生した場合または危険性が高まったと判断された場合は即刻中止することとした。ICレコーダーの情報をテキストデータに起こし、個人識別情報等は分析に支障の無い範囲で削除、加工して分析を行った。

発表者は、調査実施施設の職員として、調査対象者すべての自殺企図当時に関わりを持っており、対象者の側からしても、面識があるスタッフである。また、調査は対象者のかかりつけ医療機関の空間において実施されたが、調査協力の如何や、語る内容は対象者の不利益に一切つながらないことを伝えた。

## iii) 本発表におけるデータの範囲

本発表においては、分析を開始しているID 1～4の対象者のデータを対象に、分析結果を報告する。

## 6. 分析テーマ\*

自殺未遂者が、自身の抱える問題との付き合いにおける主体性を取り戻していくプロセス

## 7. 現象特性\*

問題解決能力を(一度は)失っていた人間が、再び主体的に問題を解決し、生きがいを獲得し、リカバリーしていく過程

## 8. 結果図とストーリーライン(現段階での)

・リカバリーの始点は自殺の失敗(医療機関への入院)、「死への囚われ」であり、終点は主体性を持って生き生きと生活していく段階である。



・自分がおかれている状況についての視野の拡がりの流れがある。はじめ、自殺未遂者は、自身の問題への対処として死に囚われ、その問題解決の方法について複数の手段を持ち合わせないなど「広い視野」が持てないでいる。例えば、何か問題に直面した際には「誰かに相談する」であるとか、「話を聞いてもらい頭の整理をする」、「問題に対する諦め」など、様々な対処法が想定できるが、ここでいう視野の狭さとは、問題への対処を、唯一死によって終わらせてしまおうという極端な思考である。このような、視野の拡がりについては、終点のリカバリーの段階に向かうにつれ、視野が拡大していき、問題に対する柔軟な思考が出来、その解決法についても様々な考えを着想できるようになる。その過程においては、病気の改善が土台としてまず必要である。病気の症状でそれ自体、視野狭窄につながることもある。そして、家族や、その他「自分のことを気にかけてくれる他者の存在の気づき」もそのプロセスを進めていくであろう。周囲の他者の存在は、問題に対応する際の解決策の一つにもなり得るし、問題に取り組む際に後押しをしてくれる存在ともなる。そのようにして、視野が拡大していく過程がある。これは、独立しているわけではなく、リカバリーのプロセス全体とも相互に関わっていつている。

・対象者は、自殺企図時点で多様な困難を抱えており、退院後(または入院中から)、それら問題と向き合っていく長い過程がある。病気の改善感が得られ、医療者とのコミュニケーションから、「治療する主体としての承認」や、治療共同体としての「主治医との信頼」が得られると、病気の症状と付き合う上での「自己コントロール感」が現れてくる。その作業は、試行錯誤を繰り返し、(失敗から自分の限界と直面し、成功があれば、そこから自身の可能性を見出す)自身の心身に関する理解が向上していき、自己コントロール感が得られていく。自身が病を抱えながらも、その意味を捉え直して生きていこうとすることでそれ自体自己肯定感の向上にもつながっていく。現実との折り合いをつけながら、生きがいを獲得し、リカバリーが達成されていく。

・しかし、同じように対象者に共通しているテーマとして、「希死念慮の持続」があげられる。淡く、切迫したものではないにせよ「死にたい」という願望は現在まで持続する者がほとんどであり、それと共存しながら生活している不安定さが見て取れた。様々な困難場面やストレスに曝された時に、対処方略の一つとして対象者は死を夢想していた。自殺企図の後遺症や、病状の改善を見ない苛立ちなど、様々なストレスによって、希死念慮が現れる。

・上記のように、ともすれば自殺企図に至る危険性を大いに秘めた集団であることが改めて確認できた。退院後、かなり時間が経過していても、一進一退の様相であり、一方向に回復に向かっている対象者は居なかった。

## 9. 分析ワークシート例(もっとも自分がアピールしたい1概念のみ) (当日回収資料)。

## 10. 分析をふりかえって(疑問点など)\*

今回はリカバリーに至る動的なうごきのプロセスを描くために M-GTA を選択した。しかし、自殺の問題はやはり個別性の大きさを感ずる。つまり、対象者が有している疾患の種類や、養育体験や経済状況、家族環境といった背景などに影響を受けると考えられる。M-GTA では、対象者間の比

較は問題にせず、分析焦点者に絞った解釈を行っていくことになるが、今回の私のデータから分析方法を考えた場合、どの方法が一番 rich で有益なデータの提示が出来るのか、と考えた時に迷ってしまった(分析テーマ、または自身の興味関心により異なる?) 今回の分析を終了したら、他の方法で分析を検討していても良いのかもしれない。

## 11. 研究計画書提出・発表の義務の有無、所属機関での指導の状況

研究計画に関して、発表者の所属機関における倫理委員会の承認を得ている。また、月に 3-4 回、大学院にて進捗発表の機会が有り、論文主査より指導を受けている。発表者の所属機関及び大学院では、M-GTA の指導を受けられる教員がおらず、今回、阿部正子先生から 7 月初旬よりメール、電話にて何度もご指導を頂いた。

## 12. 発表を終えての感想、今後の予定

H26 年 10 月には分析を終了し、学位論文執筆を開始したい。

大変貴重な場で発表の機会を頂き、多くのコメントを頂きましたこと深く感謝致しております。木下先生の著作を傍らに分析を進めたつもりでしたが、読み込みが足りず、分析テーマと分析焦点者の設定という最も重要な点に関する検討が不十分であったことを強く感じました。一旦理解できたつもりでいても、データから長く離れてしまったりすると、重要なポイントを失念してしまい、うまく分析が進められないもどかしさを感じていました。

ほかの発表者の発表を聞きながら、大いに刺激を受けました。また、多くの貴重なご助言を頂き自身のやるべきこともいくつか見えてきました。「研究をしっかりと仕上げなくてはいけない」、と身の引き締まる思いです。自分が研究を進めていく上で、今回発表させていただけたことはとても有意義でした。ありがとうございました。

## 13. 頂いたコメント

### ①分析焦点者、分析テーマの設定について

- ・「安定」、「リカバリー」、「回復」、「一定期間」など、定義、解説が必要な言葉が多く並んでいる。
- ・分析焦点者は、もう少しコンパクトに設定したほうが良いかも(分析の際に、何度も思い返す必要があるため)。
- ・発表者が明らかにしたいのはどういった「プロセス」なのか。“主体性を獲得する”、などはもしかしたら大きすぎるのではないか。むしろ、研究する人間の背景を考えると、危機介入的な、どうしようもなかった状況から「何とか生活を出来ている」くらいの対象者の段階に興味を持っているのではないか? すると、現状の大きすぎるテーマとはかい離がある。自身の関心と、データから言える範囲を確認しながら分析テーマの検討を行ってみてはどうか。

### ②概念・定義・分析ワークシートについて

- ・提示された概念は、ワークシート内のヴァリエーションを説明しきれていないのではないかと。概

念の説明できる範囲(定義と照らして)について検討する必要があるのではないかな。

- ・概念が大きすぎる。「現実と折り合う」って、(分析焦点者に限らず)誰でも人生と折り合いをつけている。焦点者ならではの言葉、概念を探してみてもどうか。
- ・概念名を挙げるときに、分析焦点者だったら、どういった言葉がフィットするかを丁寧に吟味してみてもどうか。(in-vivo 概念も含めて)
- ・対象者ならではの、データにフィットした概念を作る必要がある。最終的に出来上がった概念や結果図から、浮かび上がって絵が視えちゃう、というのが M-GTA の真骨頂ですから。

### ③分析全体について

- ・心理的なプロセスに強く関心を向けているようだが、具体的な行動レベルで起こっている相互作用や現象に注意を向けた方が良い。内面や心理的側面にばかり目が向いてしまうと分析が困難となる。また、心理的側面のみにクローズアップするのであれば、M-GTA を採用する必要もなくなる。
- ・発表者にとって、分析対象者は興味のある対象なのか？ 分析を行っていく対象に強烈な興味がないと、データ収集においてもつまらない内容のデータになってしまう危険性もあるし、質的分析を乗り切るためのエネルギーも得られない。
- ・概念のネーミングセンス、といったことも確かにあるかもしれないが、それ以上に重要なのが、分析テーマと分析焦点者の設定である。枠組みさえしっかりしていれば、全体の方向性も見えてくる。

### 【SVコメント】

阿部正子(長野県看護大学)

最初は大高さんから資料を頂き、研究背景を読み進めていく中で分かったことは、世界から見ても日本の自殺者数は多く、国をあげてさまざまな対策を講じているにもかかわらず、目に見える効果が挙げられていないこと、また自殺未遂者の再企图予防については自殺対策総合大綱の中でも重要課題として挙げられているが、未遂者の回復プロセスを明らかにする研究は皆無であることから、本研究は行政や臨床において支援を行う際の重要な示唆を提供できる可能性があるという、社会的意義の明確なテーマであるということでした。その上で、大高さん自身がなぜこの研究に関心を持ったのか、臨床に携わる中でどんな問題意識を持っているのかを電話によるSVの中で最初に確認をしました。M-GTA ではデータを解釈する「研究する人間」が非常に重要で、データから読み取った意味に対して何よりも自分がリアリティを感じられるかどうかのポイントになるため、大高さんの問題関心をできるだけはっきりと確認しておくことが不可欠だったのです。文献レビューではあまりリアリティ感が伝わってきませんでしたが、ご自身がソーシャルワーカーとして自殺未遂者の方々と接する日々(経験)の中から何を知りたいのか、支援に携わっている中でどんな手ごたえを感じて

いるのか、この研究で何を明らかにしたら実践活動をどのように変容させていけるのか等、問いかけて説明を求めていく中で、支援者としての緊張感や退院後の生活支援で多職種連携がうまくいった事例、回復に寄り添う支援モデルを描き出したいという動機が見えてきました。また、臨床で対象者と関わる中でご自身が抱く「何をしでかすかわからない不安」「この人は良くなっていくんだろうか？」といった率直な感覚は、相手をより深く理解したいという思いや、どういう働きかけが良いのかを模索する強い動機になっていると感じました。このやり取りは分析テーマを考える上で、「自分が明らかにしようとするのは何であるか」を確認することにつながるため重要だと考えます。

続いて分析過程についてSVを進めました。最初の分析テーマは「自殺未遂者はいかに現実との折り合いをつけ、自殺以外のストレスへの対処を獲得していくのか」というものでした。現象特性は「自殺未遂者が再び生きがいを獲得し、リカバリーしていく過程」と表現されていました。分析ワークシートも2つ見せて頂きましたが、概念が四文字熟語で表現されていて自殺未遂者でなくても説明概念として用いられる大きな概念だという印象でした。電話 SV では「分析焦点者からみるとこの概念はどういうことが説明できるのだろうか」と問いながら、ヴァリエーションと理論的メモに書かれた解釈過程を辿りました。実際にヴァリエーションをみるとたくさんの説明概念が浮かんでくるのですが、大高さんは「概念を沢山作りすぎちゃいけない」という思いがあったようです。確かに、概念ばかりを生成するだけでは単に作業を行っているだけで、分析が深まっていけない恐れがありますが、反面、大高さんのそうした思いは(初学者が陥りやすいのですが)、着目した部分の意味を考えているつもりでも、はるかに大きな意味で考えてしまい、抽象度が高すぎたり包括的な概念になってしまうという結果につながっていました。M-GTA は grounded-on-data で分析するのですから、あくまでデータの着目部分から言える範囲で解釈する必要があります。概念に求められるのは、一定程度の多様な具体例が説明できるかどうかであって、実際の具体例以外にもあまりにもたくさんの場合が説明できそうであれば、概念が大きすぎると考えます。私が前述した「自殺未遂者でなくても説明概念として用いられる」という印象が、これに当てはまります。

もう一点、概念を生成する際に大高さんが疑問に思われていたことは、「ヴァリエーションが増えてくると、どうしてもケース間の比較をしてしまう」ということでした。おそらく対象者の背景の違い(個別性)に注目してしまうということでしょう。この点も初学者が悩むところですが、M-GTA はデータ提供者に共通した特性を理論化していくので、個々のデータ提供者に特徴的なことは無視していきます。ではどのようにデータを見ていくかというと、分析テーマと分析焦点者の視点からです。分析焦点者というのはその研究で設定される視点で、実際にデータ提供に協力してくれた人たちを抽象的に限定集団化したものです。大高さんは分析焦点者を「自殺企図後、一定期間安定して経過している自殺未遂者」と設定していましたが、発表会では「精神科疾患の既往や通院歴は入らないのか」という疑問が出ました。分析焦点者の設定は、方法論的限定としてデータの分析だけでなく、その結果が責任を負う範囲を「人(限定集団)」により条件づけること、また分析焦点者にとってデータのある部分はどういう意味になるだろうかという視点で見ていく、つまり、分析者である自分自身が分析焦点者というもう一人の視点を経由しデータを見ていくことで、結果の適応可能範囲や一般化可能範囲を示すことができ、実践的活用がしやすくなるというメリットがあります。緻密に手堅く分

析を進めていくためにも、ここはしっかりと検討していったほうがいいです。

最後に分析テーマです。SV をする際に最も重要視するところですが、分析ワークシートのところに「(研究者が) 日ごろ経験するのは視野の拡大、問題の大局的な捉えなおし、外在化させるなど様々な戦略によって、患者は問題に向き合っているように感じる」という大高さんの解釈に大きなヒントがありました。自殺は個人としてはどうしようもない問題を抱え、他の選択肢が見えなくなり、死という極端な方法をとってしまうという“視野狭窄”が起こることであり、自殺未遂者が迎える回復のプロセスにはそれとは逆の“視野の拡大”がみられるのではないかという“動き(プロセス)”を表現していると思いました。電話 SV では確定しきれませんでしたが、発表会の中で“これが分析テーマなのではないか”という指摘を頂いたことは、とても大きな収穫であったと思います。

今回、構想発表で応募いただきましたが、ある程度インタビュー調査が進んでいたことと、今年度修士論文を提出するというスケジュールを考え、中間発表へ切り替えて頂きました。発表会の 2 週間前のことでしたので、仕事と発表準備の両立は大変だったと思います。一方、私は大高さんの思考の言語化を補助する問いかけ役として関わらせていただき、発表会を含めてここまでたどり着けたことに安堵しています。あとはご本人の頑張りで良い成果を上げてほしいと願っています。また、今回の発表会に参加された方々にも同じようにエールを送ります。You can do it! 頑張ってください。

#### 【第4報告】

かくしんう

霍沁宇(一橋大学大学院言語社会研究科 M2)

Huo Qinyu : Hitotsubashi University, Graduate School of Language and Society

#### アカデミック・リーディングの授業に関する一考察

——上級日本語学習者の読み方の変容プロセスを中心に——

Observations in Classes on Academic Reading : Processes of Change in Reading Comprehension Among High-Level Japanese Language Students.

#### 1. 研究上の問い

筆者は以前日本語学校で読解の授業を受け、留学生試験<sup>1</sup>や N1<sup>2</sup>の読解の練習をたくさんさせられた。そうした授業は、ほぼ全員 N1 に合格し、大学院を目指している当時のクラスの学習者のニーズにあまりこたえられないと感じた。このような日本語上級レベルに達し、それぞれ専門が異なる学習者を対象にする場合、どうすれば彼らが役に立つと感じ、かつ満足できる読解の授業ができ

<sup>1</sup>日本留学試験は、外国人留学生として、日本の大学(学部)等に入学を希望する者について、日本の大学等で必要とする日本語力及び基礎学力の評価を行うことを目的に実施する試験である。

<sup>2</sup>日本語能力試験 N1 レベルのことである。日本語能力試験は日本語を母語としない人の日本語能力を測定し認定する試験である。N1 は一番高いレベルであり、幅広い場面で使われる日本語を理解することができるレベルである。

るかは筆者の問題意識である。日本語学校や大学、大学院で勉学、研究している上級学習者は日本語で書かれた専門分野の教科書や文献を読む必要がある。このような学習者の期待にこたえるために、アカデミック・リーディングの練習を読解の授業に取り入れることが必要だろうと思われる。

アカデミック・リーディングについて、日本語教育において先行研究や定義は見当たらないが、上記のような上級学習者の場合で考えると、アカデミック・リーディングとは論文やレポートを書くために必要な読み方であり、文章を正確に、深いレベルまで理解するだけでなく、その上で自分の意見を持つという批判的、創造的な読みも必要になる読み方であると考ええる。

本研究の対象授業は深く、正確に読むことと創造的、批判的に読むことに必要だと思われる読み方を授業の中で学習者に意識してもらう形である。本研究は授業を受けた上級学習者に対する半構造化インタビューで得られたデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を用いて分析し、学習者の読み方の変容プロセスを明らかにすることを目的とする。また、本授業のデザインを考えた授業の担当教師（1名）にもインタビューをし、授業をデザインした目的や意図、そして授業を通して感じたことなどについて聞く。最終的に教師のデータの分析結果と学習者側の結果と比較し、アカデミック・リーディングを上級読解の授業に取り入れる可能性や問題点について考えたい。

## 2. 研究方法

### ①調査対象

本研究は 2014 年夏学期都内某大学で行われているアカデミック・リーディングの授業を対象にしている。授業に参加した学習者は全部で 21 名であり、全員上級以上のレベルである。本研究の対象学習者は 21 名の中の 20 名である（学習者の詳細について表 3 を参照）。

授業の全体構成は表 1 の通りである。毎回の授業の流れとして、(1)先生が課題について説明、(2)学生が各自文章を読み、課題をする、(3)グループディスカッションで課題の答えをひとつにする、(4)発表、(5)フィードバックとなっている。毎回授業で扱うすべてのプロダクトを学習者に各自ポートフォリオに整理してもらう。

表 1 コースの構成(全 12 回)

深く、正確に読む(前半)		批判的、創造的に読む(後半)	
1	キーワードを定義する	7	事例を収集する
2	行間を読む	8	参考文献を探す
3	接続詞を入れる	9	疑問点に反論する
4	予測をする	10	代替案を考える
5	キーセンテンスの連鎖を見る	11	自分の関心を説明する
6	文章構造図を書く	12	他者の感想を集める

②データ及び調査、分析方法<sup>3</sup>

表 2 データ及び調査、分析方法

データ	詳細	分析方法
予備調査: インタビュー	① コース始まり、コース中と終わりに3回行う ② 学習者にこれまでの経験や授業を受けて感じたことについて聞く(一人10分程度)	学習者の背景や授業を受けて感じたことの全体イメージについて分析する。
本調査: 回想+インタビュー	① コースが終わった後に行う。 ② 学習者にポートフォリオを見ながら授業でやってきたことを振り返ってもらい ③ ②と同時に予備調査で分かった結果を参考に作られた質問項目でインタビューを行う。 ④ 担当教師に授業を振り返ってもらい、インタビューを実施する。	① M-GTA(木下, 2003)を用いて学習者のインタビューデータを分析し、学習者の読み方の変容プロセスを明らかにする。 ② (本研究ではないが、最終的に)学習者と教師の分析結果を比較し、今後の授業デザインに提案する。
補足資料	① 毎回の課題のワークシート、コメントシート ② 授業の録音(GW+教師の解説)	上記で分かった結果を検証、補足

## 3. 予備調査で分かってきたこと

## ①1回目の予備調査から

表 3 学習者の背景

母国語	所属	専門	日本語学習期間	日本滞在期間
漢字圏:4	学部生:7	言語学:3	1～3年:4	～1年:9
非漢字圏:6	研究生:4	商学:3	4～6年:9	1～3年:8
中間 <sup>4</sup> :10	交流学生:3	法学:2	7～9年:4	4～6年:2
	大学院生:1	社会学:3	10年～:3	6年～:1
	その他:5	経済学:1		
		その他 <sup>5</sup> :8		

<sup>3</sup>本研究の対象授業について、筆者だけでなく、大学の先生と他の院生と共同でプロジェクトとして研究を進めているため、たくさんの手段でデータを収集している。筆者の研究におけるデータ分析方法は表2のとおりである。

<sup>4</sup>中間：韓国語の場合

<sup>5</sup>その他：交流学生等、母国で日本語専門で、本研究の対象授業が行われている大学で他の専門を勉強している場合。

表 4 学習者の読解学習経験

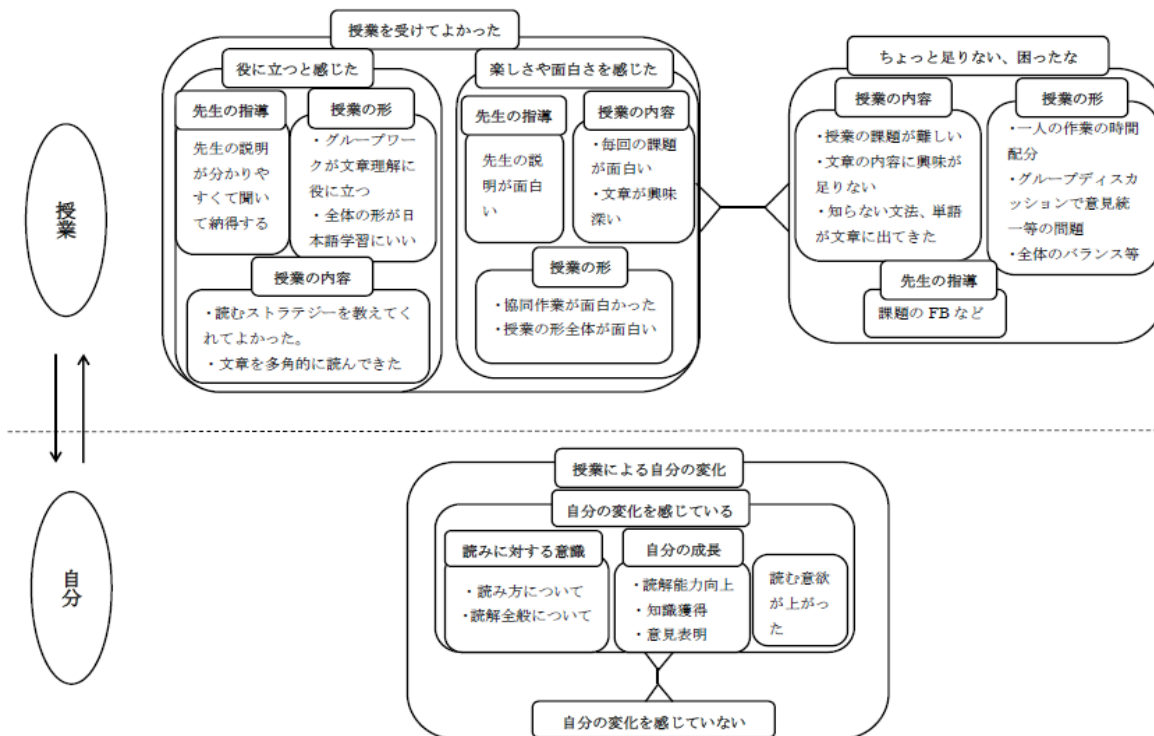
独学の場合	読解の授業を受ける場合 <sup>6</sup>
受験(留学生試験、N1、大学入学試験)のために読む 興味(漫画、小説、興味のある専門分野の本など)のために読む	受験のための読解の授業(留学生試験、N1、大学、大学院入学試験)、速読の授業、専門文献を読む授業、文学作品を読む授業など

表5 学習者の普段の読むスタイルや使っている戦略

ボトムアップ処理	トップダウン処理/相互作用的处理
未知語を調べながら読む、難しい文法を簡単な文法に置き換えて理解する、長い文を前後に分けて理解する…	重要な未知語だけ調べる、難しい内容を音読する、重要なポイントにマークをつけながら読む、理解度によって読む回数を増やす、読みながら頭でストーリーを作る、まとめながら読む、全体構造を考えながら読む、未知語の意味を文脈で推測する、読んだことについて他人と意見交換 「普通に」読む 予測しながら速く読む、情報を取捨選択しながら読む、スピードを意識しながら読む…

② 2 回目の予備調査から

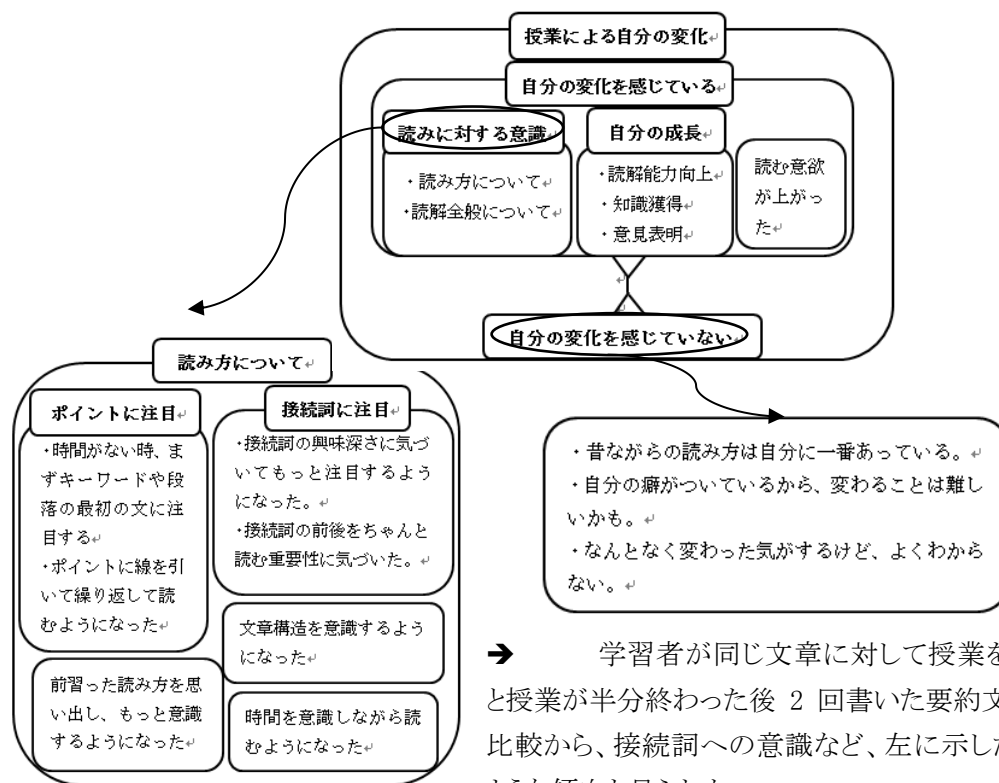
図1 学習者が前半の授業についての感想(全体イメージ)



6 学習者によって、独学だけの場合、独学+授業を受ける場合、授業を受けるだけの場合などに分ける。また、授業を受ける場合にも、母国で授業を受ける場合と日本で受ける場合、そして両方ある場合などのバリエーションが見られた。



図2 学習者が前半の授業による自分の変化について感じたこと



→ 学習者が同じ文章に対して授業を受ける前と授業が半分終わった後 2 回書いた要約文の前後の比較から、接続詞への意識など、左に示したのと同じような傾向も見られた。

予備調査の分析結果から、以下のことが分かった。

- 表 3、表 4、表 5 で示したように、本研究の対象学習者は多様な文化背景、学習経験を持ち、普段の読み方にもバリエーションが見られる。
- 学習者が前半の授業を受けて、主に授業の形(一人で読む⇒グループディスカッション…)、授業の内容(文章、課題の内容)、そして教師の役割(課題についての説明とフィードバック)という三つの面において役に立つと感じたり、面白さを感じたり、逆にちょっと足りないと感じたりしたことが分かった。
- 前半の授業を受けることによって、学習者が読み方への意識——メタ認知が高まった可能性が考えられるのではないかな。

上記の調査結果から、学習者の読みの変容は、多様な背景を持つクラスメートとの社会的相互作用(グループディスカッション、発表)、教師との社会的相互作用(質疑応答、フィードバックなど)、そして文章そのものとの相互作用などさまざまな要因で起こった可能性が考えられたため、学習者の読み方の変容プロセスをより調査する必要があると考える。

#### 4. 本研究で M-GTA を活用する理由

##### ① 質的研究を行う理由

本研究の目的は、アカデミック・リーディングの読解の授業を通して、上級日本語学習者の読み方の変容プロセスを明らかにし、今後の上級読解の授業に提言することである。予備調査で分かったように、学習者の背景は単一ではなく、多様性や複雑さが見られる。そして、授業でグループディスカッションなどで学習者同士、学習者と教師の間に社会的相互作用が発生し、学習者の読む行為がどの要因とどうかかわり、どのように変化してきたのかについては、分析視点を事前に決定し、測定項目として収集するなどの方法では、重要な現象や過程を見逃してしまう恐れがある。また、学習者の日本語能力が上級になればなるほど、初、中級のように、正解のあるテストなどで測定しにくくなる。そのために学習者の経験、行為、意識等に関してインタビューにより収集したデータに即して分析し、概念や理論を生成し、論理的な理解を深めることを目的とした質的研究を選択した。

##### ② M-GTA を用いて研究する理由

グラウンデッド・セオリーはデータに密着した分析から独自の説明概念を作り、それらによって統合的に構成された説明力に優れた理論であり、また、社会的相互作用に関係し、人間行動や、他者との相互作用の変化を説明、予測でき、実践的活動を促す理論でもある(木下, 2014)。また、M-GTA は、【研究する人間】及び研究者の問題意識、そしてデータの中に表現されているコンテキストの理解を重視するため、切片化をしない。分析焦点者である人間の認識、行為、感情、そしてそれらに関係している要因や条件などをデータに即して丁寧に検討していく(木下, 2014)。本研究において以下の理由で、M-GTA を用いて研究を進めたいと考える。

(1) 本研究は社会的相互作用を扱う研究である。

##### a 学習者同士の社会的相互作用

本研究の対象者は文化背景や学習経験など、多様な背景を持っている学習者であるため、それぞれ自分なりの背景知識、読み方や考え方を持っていると考えられる。特に本研究の授業で毎回扱う課題は、正解がないものがほとんどであり、学習者が各自文章を読んで、同じ課題に対しても、違う解釈や意見を持つことが多いと思う。一人で文章を読んで、課題をしてから、グループディスカッションを通して各自自分の意見を述べ、グループとして結果を出す。グループメンバーで意見を統一するために、お互いに話し合ったり議論したりしなければならない。その後、他のグループの発表を聞くことにより、更にたくさんの違う意見に触れることができる。このような学習者同士のグループディスカッションや、その後の発表で、学習者同士の社会的相互作用が自然に発生すると思われる。

##### b 学習者と教師の社会的相互作用

本研究の対象授業において、教師が文章や課題について説明したり、学習者がグループディスカッションをしているときに教室で巡回し、学習者の質問に答えたり、フォローしたり、発表後、フィードバックしたり、全体をまとめたり、また授業後、学習者からの個人的な質問に答えたりするな

ど、教師と学習者の間に社会的相互作用がたくさん見られる。

c 学習者と文章との相互作用

社会的相互作用と言えるかどうかは検討する余地があると思うが、学習者と文章の間にも相互作用があると考え。学習者は文章を読んでいるとき、文章に書かれてある文字、文、段落、文章へと解読を進めていくというボトムアップ処理だけでなく、自分が持っている背景知識や文脈で文章の内容を予測したりするというトップダウン処理も同時に行っている。つまり、テキストからの情報と読み手の予測を中心とするテキストへの働きかけとの「相互作用」が行われていると思われる。

(2)プロセス的特性を有している

本研究の対象授業で、前半(深く、正確に読む)と後半(批判的、創造的に読む)にそれぞれ 6 種類、全部で 12 種の読み方を学習者に課題の中で意識することを目的とする。それぞれ違う文化背景や経験により形成された学習者の各自の読み方が、授業が進むことにより、変化していく可能性が考えられる。この変化にはプロセス的な特性を有していると考えた。

(3)限定された範囲内において優れた説明力を持つ理論生成を目指す。

本研究はアカデミック・リーディングの授業において、学習者同士、学習者と教師、そして学習者と文章との相互作用に注目し、上級学習者の読み方がどのように変化していったのかという変化の過程を説明できる理論の生成を目指し、今後の上級読解教育に参考になればと考える。

## 5. 研究テーマ

アカデミック・リーディングの授業に関する一考察ー上級日本語学習者の読み方の変容プロセスを中心にー

## 6. 分析焦点者

違う文化背景や学習経験を持ち、日本で勉学、研究するために日本語で書かれたアカデミックな文章を読むことが必要な学習者が同じ読解のクラスにいる場合の上級日本語学習者(分析焦点者についての、今までの検討経緯:「上級日本語学習者」⇒「母国語や学習経験など、たくさんの背景を持つ学習者が同じ上級読解のクラスにいる場合の上級日本語学習者」⇒今の検討結果)

## 7. データの収集方法と範囲(方法論的限定)

本研究の本調査は、授業を受けた 21 名の学習者の中の 20 名に対してそれぞれ個人インタビューを行う(調査に協力的でなかった学習者が 1 人だけいた)。調査は 7 月 27 日～8 月上旬までに行う予定。

## 8. 三つのインターラクティブ性のうち、一つ目と三つ目に関する具体的内容と考え

### ①研究者と協力者

研究者は筆者である。筆者は本研究の対象授業に TA として参加してきた。主に資料の準備など

担当先生を手伝う作業が多かったが、たまに学生と一緒に授業に参加したりもした。協力者は本研究の対象授業に参加した上級日本語学習者(21名の中の20名)である。

### ③研究者と応用者(現実場面)

応用者は今後の上級アカデミック・リーディングの授業実践を行う教師、特に日本の大学などの教育機関で、一つのクラスに、多様な文化背景や、学習経験を持つ日本語学習者がいる場合の授業デザインに参考になればと考える。

## 9. 分析テーマ

本研究は、多様な背景や読み方を持ち、日本の大学、大学院で勉学、研究するためにアカデミックな文章を読む必要がある上級日本語学習者の読む行為が授業という社会的相互作用の中で、どういう要因とどう関わり、どのように変容してきたかという過程を明らかにしたいと考え、分析テーマを「アカデミック・リーディングの授業を通しての上級日本語学習者の読み方の変容プロセス」にした。

## 10. 現象特性

ある同じ文脈の影響で、それぞれ違う背景や意識を持つ人々の行為の変容プロセス。例えば、外国語教育の場合で考えると、アカデミック・ライティングの授業を通しての学習者の書き方の変容プロセスや、ビジネス会話の授業を通して、学習者の話し方の変容プロセスなどが考えられる。また、医療現場の場合(筆者の知っている限りの母国の場合)ある患者さんの病状や治療に関して、(それぞれ担当や専門が違うかもしれない)関係者の医者が定期的に集まり、各自の観点から討論を行い、その結果を用いて患者さんの治療案を改善したりするというプロセスが考えられる。

## 11. インタビュー質問項目(予備調査の結果を参考に作成した)

別紙(回収資料)参照。

## 12. 分析を振り返って

本研究計画に関して、SVの先生からたくさんのご指導をいただいた。

まずアカデミック・リーディングの実践研究や定義について、日本語教育において先行研究は見当たらないが、一般的の外国語教育や韓国語教育など(特に現地で勉強している上級学習者や国内でも大学や大学院を目指している上級学習者を対象にする)先行研究の読み込みが足りないと感じ、今後の課題にしたいと考える。

そして、方法論の面について、本研究における社会的相互作用をはっきり示すことや、インタラクティブ性について具体的に書くこと、分析テーマ、分析焦点者の設定、及びインタビュー質問項目の提示など、たくさんの貴重なコメントをいただき、それに基づきレジュメの修正をした。

現段階の疑問点として、予備調査のインタビューデータ、そして毎回の授業で集めた学習者のコメントシートも本調査のインタビューデータと合わせて M-GTA で分析することは可能かどうかとい

う点についてご意見、ご指導をいただきたい。

#### 主要参考文献

石黒圭(2010)『「読む」技術 速読・精読・味読の力をつける』, 光文社

木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い』, 弘文堂

木下康仁(2007)『ライブ講義 M-GTA―実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』,  
弘文堂

甲田直美(2009)『文章を理解するとは―認知の仕組みから読解教育への応用まで―』, スリーエーネットワーク

館岡洋子(2011)『一人で読むことからピア・リーディングへ―日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』, 東海大学出版会

#### 【SV とフロアからのご指摘と感想】

- ① 学習者が漢字圏、非漢字圏と中間に分けられているが、非漢字圏は具体的にどのような国のことなのか。  
→ブラジル、ドイツなど漢字を使わない国
- ② 専門用語について  
「未知語」→学習者にとってまだ知らない単語のこと  
「メタ認知」→メタ認知は簡単に言うと認知を認知することである。読解においてのメタ認知というのは、自分の読む行為をモニターし、必要に応じてコントロールできる能力のこと。例えば、内容がよく理解できていないと思ったらもう一回読んだり、要点をつかめるために線を引いたり読んだりするなど。
- ③ 多様な背景を持つ学習者と書いてあるが、どういう多様な背景が読み方の変容に関わるのか。  
→母国語、専門、学習背景、普段使う読むストラテジーなどが考えられる。
- ④ 多様性、バリエーションを見るのであれば、KJ 法も選択肢として考えられるのではないか。どうして M-GTA を使うのか。  
→本研究は多様な背景を持つ学習者がアカデミックな読解の授業という社会的相互作用の中で、読み方がどういうふうに変容していくかという変容のプロセスを研究したいので、M-GTA を選択した。
- ⑤ どうして漢字圏、非漢字圏、そして中間の学習者に分けてそれぞれのプロセスを見ないのか。  
→日本の大学などの教育機関で、ひとつのクラスにたくさんの文化背景を持つ学習者がいる場合が多く、授業という社会的相互作用の中で、多様な文化背景を持つ学習者の読み方がどのように変容していくかを見るのが本研究の目的である。また、本研究の対象者の日本語レベルはすでに上級以上に達していて、上級になればなるほど、漢字圏、非漢字圏、中間の学習者の漢字の認識の違いがなくなり、同じ(非)漢字圏の中にも学習経験などにより読み方にかんがりの多様性が見られるので、三つのグループに分ける意味がそんなに小さくなるのではないかと考える。

- ⑥ 分析テーマは「アカデミック・リーディングの授業」と「多様な背景を持つ学習者がいるクラスでの相互作用」と二つに分けているように見えるが…  
→先生方のコメントを受け、分析テーマについてもう一度考えた。本研究の最終目的は日本で行う上級日本語学習者向けのアカデミック・リーディングの授業のあり方について提言することであるため、本研究で行う実践を通して、学習者がどのような読み方の変容をしたのかをまず明らかにしたい。本研究の対象授業(アカデミック・リーディングの授業)において、学習者同士の相互作用だけでなく、学習者と文章との相互作用、学習者と教師との相互作用という三つの相互作用があるため、現時点で分析テーマを「アカデミック・リーディングの授業による読み方の変容プロセス」にしている。
- ⑦ 「読み方」とはどういうものが含まれると予想されるか。  
→大きく分けると、「精読」、「速読」、「平読」、「音読」などがある。読むスキルで言うと、「接続詞を意識しながら読む」「段落の最初だけ読んでポイントをつかむ」などの読解のストラテジーも考えられる。  
⇒(SV)例えばグループディスカッションで違う文化背景の人と話す中で今までと違う読み方に接することによって、読む態度が変容することも読み方の変容と言えるのではないか。
- ⑧ どうしてグループインタビューではなく個人インタビューを選んだのか。  
⇒(山崎先生のご指摘)グループインタビューは研究に参加してくれる人たちのお互いの対話を生かし、研究する側がコントロールできる要素が少なく、一気にたくさんの人の意見が聞けるが、一人ひとりの経験がどういう形で展開していったのかを研究するには個人インタビューのほうが適している。またグループインタビューの場合は他者を意識して語らざるを得ないので、普段から仲良しのグループじゃないと、どちらかというと本音より規範がしやすい。
- ⑨ 今回の調査対象者がすでに母国語で批判読みの教育を受けているのか  
→予備調査で学習者からも少し話が出て、母国語で批判読みの教育を受けたことがあると聞いたが、他の学習者の場合は不明なので、コメントを受けてこの点が重要だと考え、本調査のインタビューで聞くことにした。
- ⑩ 予備調査のデータや、他の調査目的で収集したデータ(例えば対象学習者が書いたコメントシートなど)も本調査のデータと合わせてM-GTAを使って分析できるかどうかについて先生方に質問し、可能とのことだった。
- ⑪ 分析焦点者が長い、もうちょっとコンパクトに、「日本の大学でアカデミック・リーディングを受講している上級日本語学習者」にしてもいいのでは。  
→まさにその通りだと思い、そのように設定することにした。

【SV コメント】

田村朋子(立教大学)

このたび私は、初めて SV をお引き受けしましたので、発表者の霍さんどのように準備をすすめていったのか手探り状態でした。そこで、霍さんには、まずは発表資料を作ってみてくださいとお願いしました。その際、「質的研究法といっても KJ 法や GTA、エスノグラフィーなど他の方法論もあります。なぜ M-GTA を採用し、他の方法論を採用しなかったのかという項目には特に力をいれて書いてみてください」とアドバイスしました。何度かのやりとりののち、霍さんはすでに KJ 法を用いた予備調査をされていること、そして、学習者の読みの変容が多様な背景をもつクラスメートや教師との社会的相互作用によって生じたと考えられたため、このような相互作用の結果どのように読み方が変容していくのかという点に着目し、そのプロセスを M-GTA で研究したいのだということがわかってきました。

発表の準備にあたり、霍さんと私が一番苦労したのは、分析焦点者の設定と、分析テーマの設定でした。私が霍さんに問いかけたのは、「教師が提供したアカデミック・リーディングの授業内容(深く、正確に読む／批判的、創造的に読む)の効果を見たいのか、あるいは、学習者が多様な背景をもつクラスメートや教師と相互作用しながら読みに対する意識が変わり、読み方が変容していくプロセスが見たいのか、どちらですか」ということでした。アカデミック・リーディングの授業内容自体の効果が見たいのであれば、量的研究でも可能と考えたからです。どちらかといえば、初め霍さんは前者を意識しているのではないかという印象を受けました。しかし、レジュメのあらゆるところに、「多様な背景をもつ学習者」という言葉がみられ、また、「予備調査を受けてクラスメートや先生との相互作用が読みの変容に影響しているのではないかと考えた」ということが書かれており、実は後者を見ていきたいと考えているのではと感じました。日本の大学における日本語のクラスは、様々な背景をもった学習者の集まりであることが多いという霍さんの発言から、研究の成果を現場に返すことを考えると、私としては、M-GTA で研究する意義は後者にあるのではないかと思います。

M-GTA の概念と手法についてはよく勉強されていて、理解に問題はないと思いますので、今一度、この研究で霍さんが何を知りたいのか、どのような現場に返していきたいかよく考えながら、インタビュー、分析に進んでいってほしいと思います。

#### ◇近 況 報 告

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 領域、(4) キーワード

- (1) 赤畑淳
- (2) 立教大学コミュニティ福祉学部
- (3) 社会福祉・ソーシャルワーク
- (4) 精神保健福祉、ソーシャルワーク実践、重複障害、コミュニケーション

私の研究テーマは「聴覚障害と精神障害をあわせもつ人の支援」です。現在、私は大学で精神保健福祉士の養成教育に携わっていますが、以前はソーシャルワーカーとして、民間の精神科病院に勤務していました。私の研究の原点は実践現場にあります。精神科病院の現場では、精神疾患のみならず複合的な生活問題を抱えている人が多く、多様な支援が求められていました。その中に聴覚障害と精神障害をあわせもつ人もいたのです。見えにくい、わかりにくい障害といわれる精神障害と聴覚障害をあわせもつ人の支援では、私自身も悩み迷い、試行錯誤の連続でした。しかし、かかわり続けることで、支援の展開に応じ多くのことを考えさせられ、ソーシャルワーカーとして、いくつかの問いが生じてきました。それは、「支援におけるコミュニケーションのあり方」「重複障害など“あわせもつこと”の意味」「支援現場におけるマイノリティの状況」などです。私の研究はこの問いにこだわり、実践をベースにした指標を作りたいという思いから出発したのです。

その後、病院に勤務しながら大学院に通い始めました。そこで出会ったのが M-GTA でした。当時、博士論文を執筆していた先輩が M-GTA を駆使し、現場の事象をリアリティ豊かに示しつつ、論文としてまとめていくプロセスをゼミ等で間近で見させてもらいました。そこで、データのディテールにこだわりつつ文脈をそこなわず全体をまとめ、流れや動きを表現できる M-GTA に魅了されたのです。その後、同期や後輩たちとともに、定期的に質的研究法の勉強会を続けていきました。加えて、木下先生の著書を読ませていただき、立教大学で開催される M-GTA 研究会に参加させていただいたのです。

研究会に参加しはじめた頃は、まだインタビュー調査の段階でした。その頃は、頭で理解するレベルだったのですが、自らの調査が分析の段階に入ると、この研究会で話されることの一つひとつが、身にしみて理解できるようになってきました。さらに、分析に行き詰っていた頃、研究会で発表の機会をいただいたことが、私の研究の大きな転機となりました。そこでの助言が大きなヒントとなり、研究を促進させる原動力ともなり、博士論文を書き上げることができたのです。

2014 年 2 月には博士論文を基にした拙著『聴覚障害と精神障害をあわせもつ人の支援とコミュニケーション——困難性から理解へ帰結する概念モデルの構築』をミネルヴァ書房より刊行いたしました。その中には M-GTA による分析を軸にした調査が含まれています。今後は研究結果を実践で応用してもらい更なる検証を重ねながら、より研究を深化させていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

.....  
(1) 加藤浩平

(2) 金子書房編集部／東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科

(3) 発達支援・特別支援教育

(4) 自閉症スペクトラム(ASD)、対人相互作用、テーブルトーク・ロールプレイングゲーム(TRPG)



私は現在、専門書出版社で心理教育分野の書籍の編集に携わりつつ大学院の博士課程で、「テーブルトーク・ロールプレイングゲーム」という会話型の桌上ゲームを用いた自閉症スペクトラム(ASD)のある子どもたちの社会相互作用についての研究に取り組んでいます。

ももとは、教育誌や心理療法関連の本など、障害児者支援とは無縁の雑誌や書籍の編集担当しておりましたが、10年前に担当雑誌でたまたま特別支援教育の特集を組んだこと、またその時に取材した先の福祉施設でASDのある子どもたちと実際にかかわったことをきっかけに、特別支援教育や発達障害支援のことを心理教育分野に伝えていく必要を感じ、いつの間にかそれらの分野をメインに書籍の企画・編集するようになりました。同時に自閉症施設や通級指導教室、親の会や自助グループを自主的に取材したり、取材先でボランティア支援員もするようになり、より深く障害支援の分野を学ぶために大学院にも通うようになり、現在に至っています。

M-GTA との出会いは、筑波大学大学院の夜間修士時代に、山崎浩司先生が講師をされていた質的研究の集中講義を聴講したことがきっかけでした。その後も筑波での集中講義で山崎先生や小倉啓子先生のご講義を拝聴していましたが、研究会自体には今年の春に入会したばかりです。定例会も今年の5月の会が初参加でしたが、編集者の視点とはまた違う、M-GTA のデータのまとめ方を学ぶことができ、たくさんの刺激をいただきました。

編集者と研究者の奇妙な二足の草鞋履きですが、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

.....

(1) 唐田順子

(2) 西武文理大学 看護学部

(3) 看護

(4) 児童虐待予防、妊娠期からの子育て支援、若年出産、助産師の役割認識

2014年8月24日(月)浜松市で行われた、静岡県西部の「母子継続看護連絡会」で、M-GTAによる研究成果『産科医療施設の看護職者の「気になる親子」への気づきから連携が発展するプロセス』を報告してきました。

この会は静岡県西部の保健機関の保健師と、産科・NICU・小児科の医療機関の看護職者、助産師会の助産師が母子保健と医療の連携を促進させ、親子を支援するために活動を行っています。今年で17年を迎える息の長い会です。これまでに、ハイリスク親子を発見するための共通のチェックリストの作成や継続的な事例検討、児童相談所からの死亡事例検証報告、講演会等を行っています。私も博士課程時代参加させていただき、刺激を受けました。静岡県西部の助産師さんは、この調査に数人参加してくださっていたので、恩返しのつもりで行ってきました。

「私が作った結果図はどう思われるかな?」、「概念名やカテゴリー名は的確に表現できていたかな?」とドキドキしながら資料の準備をしました。発表時間を70分いただいたので、概念名と看護

職者の語りを多く紹介できるような構成にしました。会場で聞いてくださる保健師・助産師・看護師さんの反応が知りたいと思い、講演後アンケートで感想を書いていただくことにしました。私が分析焦点者になり、分析ができていたのか評価を受けることになります。思いを込めてパワーポイントを作成していると73枚にもなり、発表直前まで削除作業に追われました。

いざ、本番。何とか時間内に発表することができました。講演の中の質疑応答では、「情報提供に際して文書料を請求しているのか」、「特定妊婦は産科医療施設ではどの程度認知されているのか」等がありました。

講演後のアンケートでは、今回の結果図が現場の状況にフィットしているかについて、「フィットしている・わりとフィットしている」の回答だけで、フィットしていないとの回答はありませんでした。ホッとしました。助産師さんからは、「日頃やっていることを概念化しているのだと感じ、自然にやっていることの言語化なんだと思えました」との感想をいただき、分析に少し自信がもてました。保健師さんからは、「保健師の情報のフィードバックがどのように看護職者に作用しているか、よくわかり、重要性を認識しました」と感想をいただきました。会の企画に方からは、「会がこれまでやってきたことの意味づけができた」と言っていただきました。実感として、研究に手ごたえを感じることができました。このような機会に恵まれた幸せを感じて、報告を終わります。



- .....
- (1) 橘田康世
  - (2) 東洋大学大学院社会福祉学専攻博士後期課程
  - (3) 児童福祉
  - (4) 保育士、保護者支援、関係構築

はじめまして、私は保育士として 35 年間保育の仕事に従事しております。今日における少子高齢化の進展や核家族化などの家族形態・機能の変化を背景として、保育所保育士への役割期待は高まっており、保育ニーズが多様化する中で、子どものウェルビーイングを願う保育士の希求は規制緩和の進行により、新たな「問い」を生み出しているのではないかと考えます。その「問い」を探究するためには、社会的相互作用に着目したM-GTAの研究は保育の実践現場で活用できる研

究に適していると思い、本研究会に4月に入会しました。

第7回修士論文発表会では「実践する人間」「研究する人間」とはいかなるものか・・・実践と研究を並行して行うことの重要性を実感し、今後の研究活動への新たな原動力となりました。修士論文発表会ではM-GTAを活用し、報告された内容はとてもオリジナリティに富んでおり、様々なヒューマンサービス分野の現象特性が表出され、さらにSVによってその「うごき」の特性が見いだされ、心に響き渡る内容でした。また、人の「生」を考える際、ヒューマンサービス分野の研究は小さな命(胎児)としての人から、身体という物質はこの世に無くなっても心の中に存在している人まで対象となるのではないかと思います。それは授かった喜びのプロセスや喪失し悲嘆しているプロセスは各領域での分析テーマは違っても、人生のプロセスであり、ヒューマンサービス分野は連動して対話をする事が可能ではないかと考えたからです。このような境地に至ったのはM-GTAの研究会に参加し、様々なヒューマンサービス分野の研究者と同じ場で学び、議論、対話を経験したからこそ得た実感です。

本研究会を機として「実践する人間」「研究する人間」としてアイデンティティを維持し、M-GTAを活用した研究を具現化できるように学び続けたいと思います。このような環境に巡り合えたことに感謝の意を申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

.....

(1) 西巻悦子

(2) 筑波大学大学院情報メディア研究科博士後期課程

(3) 図書館情報学・学校図書館

(4) 学校図書館経営、司書教諭、カリキュラムマネジメント、コレクションマネジメント

・自己紹介:都立高校で長年、国語科教諭・司書教諭・主幹教諭として勤めてきました。国語科の授業は自分が燃えていないと面白くないし、興味もやる気も出してもらえないっていつも思っていました。なので、授業研究はそれなりに頑張ったつもりです。でも、どの勤務校でも、生徒の読み物は豊富でも、私の調べ物には・・・てな感じで、理解のある学校では購入してくれましたけど、そうでないところは、自分で何とかする感じでした。でも、2003年から司書教諭になってわかったんです。伝統的に学校図書館は読書の場だったってね。それで、主幹教諭になって、学校経営に学校図書館活用をと言いついてはみましたが、螳螂の斧でした。では、というので前期課程は在職中に修了させ、大分たってから、途中

退職して、学校図書館はカリキュラムにどうかかわることができるかを追っかけてます。欧米では当たり前でも、日本はまだ。しかも教育学分野で学校図書館への認識は薄い。学校図書館は学習環境であればいいのではってな程度！司書教諭に充てられた人が限られた時間の中でも何とか図書館業務をやるようなこれだけはというものを確定したいと思ってます。

・研究関心や研究の進捗状況:「学校図書館経営の研究:司書教諭の専門性を中心に」(仮題)  
司書教諭の門性は学校図書館のコレクションマネジメントを構築することであり、それによって、学校経営のカリキュラムマネジメントに参画することが可能であるという仮説を実証したいと思ってます。小・中では比較的事例があり、成功している司書教諭もおられるのですが、公立高校ではまだ司書教諭として活躍している方を探しあぐねています(私立は大勢おられます。逆にそれが売りなので!)。小学校の司書教諭実践家のヒューマンストーリーに強く心を揺さぶられるのですが、そこまでゆくのは相当な覚悟が要る!ならば、要素分析で何とか司書教諭として自立するための糸口でも析出したいというのが願いです。

・研究会参加の感想や学び:林先生のお話を伺って、研究継続への意欲が湧きました。勘でものを言うなんて研究に携わる者にあるまじきでしょうが、この方についてゆきたいナンテ!学校図書館の職種を巡って論を張るのであれば、理と情とのちょうどの兼ね合いが難しい(私には無理か)と、凹んでいたところだったのです。こういう場合は、どうしてもM-GTAで実証するしかないと思ってます。人(資質も含めた)の課題なのですから、量的に調査したところで、従来とどう変わるというのでしょうか、体験してきた人の話の中から立論するしかないかと思ってます。

・研究会参加できて感謝の一言:高丸様にお目にかかれ、高丸様の資料を拝読させていただきました。そこからの気付きで以前からやっていたことの中に着地点を見出せたのです。昨日、指導教官にその一連のストーリーを一言申し上げたら、全体構想の見通しがついたといっていただけでした。なので、8月研修や合宿には以前からの計画があって参加することが無理なのですが、9月以降は精力的に勉強会に参加したいと思ってます。

.....

- (1) 坂上和子
- (2) 認定NPO 法人「病気の子ども支援ネット遊びのボランティア」
- (3) 社会福祉
- (4) 子どもの入院、病院ボランティアコーディネーター

M-GTA研究会第7回修士論文発表会は大変有意義な会でした。この発表の翌日、小児がんの治療を終えた患者と家族のサマーキャンプ1泊2日があり、約30人を引率し、ほぼ徹夜で語り明かしたあとに、大学院のレポートも待ち受け、今やっと、パソコンに向かう時間がとれたところです。すぐに感想をお送りすべきところ、たいへん遅くなりました。

さて、M-GTA研究会第7回修士論文発表会、「こうした研究会を望んでいる院生がたくさんおられるんだなあ」が、教室に入った最初の印象です。指導教授がM-GTAをしたことがなく、インタ

ビュー内容では分析できるデータが思うように取れないとか、そんな発言は一人ではなかったし、兵庫県から、京都から、遠くからも見えていました。自分で本を読み、必死で探して、ここに辿り着いてきた、私もそうでした。

私は大学院の倫理審査が4月末に通ったところで、さて、「5月からインタビューに出かけていいですよ」のところで足止めをくらいました。データがとれる聞き方ができるだろうか？分析はGTAとしたが、それすらちゃんと理解できていない。グレイヒル戈木慈子先生と木下先生の本を積み上げて、両者の違いをみたり、GTAとは何か、いちから独学。時間がどんどんたち、とうとう、行ってから考えようと、最初のインタビューに出たのが6月30日でした。この間、ネットで貴研究会を知り、飛びついた次第です。「論文がすすむ」「SVが付く」という言葉につられ、無謀にも発表を申込みました。

林先生との出会いは神と仏が、降りてきた瞬間でした。最初にメールの添付ファイルで発表会発表申込書に7つのコメントが添えられて戻ってきました。

「研究がないということだけで小児医療施設に焦点をあてるのでは、説得力に欠ける、ここはなぜ小児医療施設を研究の対象にするのかを説明する必要がある」など。焦点が定まらず、あいまいになっていたことをピシッと指摘されました。7つともそういう感じ。「すごいな、これは！」。人の研究なのに、なんで一発でこんなによく見えるんだろう？？本当に不思議でした。実際、林先生とお会いしてそれはさらに、はっきりしてきました。よく見えるメガネが与えられたような感じ。初回のSVは90分も時間をとっていただきました。（自分の指導教授に30分、時間を下さいとお願いするのも恐縮する）ので、7つのコメントのおかげでほぼ解決できたところまで来たと思っていました。分析テーマにほとんど時間が割かれ、最後は分析テーマのAとBの言葉の定義をしてきてください。でした。帰宅して定義を調べていくうちに、このテーマでもまだ絞りきれていないことがわかり、もう一度お願いしてSVの時間をいただきました。次も70分、このおかげでそれまでぐるぐると回っていた手漕ぎボートがすいっと前に進んだ手ごたえを感じました。

2回目のSVの翌日が、3人目のインタビューの日でした。そのときは、前の二人とかなり違って、内面につっこんだ質問ができたと感じられました。また私が同じような仕事をしているので、自分の経験が出る欠点がありましたが、SVを受けた後は、相手に語らせる、言葉が出て来るのを待つ、そういうインタビューが出来たと思います。なぜなら林先生がそうであったからです。「坂上さんのその言葉を待っていたんです」と、私にしゃべらせてくださいました。つまりインタビューの方法も知ることができたのです。もちろん、本を読めば、そういうことは書いてあるのですが、私の体で、腑に落ちたという感じ、そういう体験がこのSVにはいくつもありました。林先生は本の執筆と2つの論文を抱えながらも、たいへんご丁寧に、私の指導に当たってくださいました。本当にありがたかったです。

これから、8月に2人のインタビューがあり、そのあとは、分析ワークシートを作成して、分析のまとめ方に入ることになります。ここで熊本の合同研究会の存在を教えてくださいました。これが8月末

でまたまたラッキーなタイミング。私の相棒の院生はKJ法で京都の研究所まで出かけ、1回8万円を払って受講し、もう1回受けるといっております。高額なお金がかかります。しかし熊本は1泊でも飛行機代込で3万円、ぜんぜん安いと思っています。

「ライブ講義M-GTA」については、私の蔵書から漏れていて、林先生に教えていただきました。この本の存在は自分では探しきれなかったものです。合同研究会や書籍の情報もたいへんありがたかったです。出会いのタイミングといい、進み方といい、私は幸運な出会いをいただきました。本当にありがとうございます。ここで学んだことは、大学院の修士論文だけでなく、今後の論文の執筆に生かします。(博士にいくことでなく、他にも論文にまとめたいものがあるので)

最後に、この研究会は、研究者が学者を育てている、院生も学者に刺激を与えていて、双方の存在が相乗効果となつてうまくできている会だなと思いました。研究で社会を変えようという研究者の熱意を感じました。第7回を迎えたそうですが、きっとここから、優秀な論文がこれからも生み出されていくのではないかと、7年の積み重ねの日々に思っています。

この会を継続維持していくのは、簡単なことではないと思います。大学院の先生たちをみていると、学生の授業をもち、ご自分の研究をする時間すらないという現状もみえていますので、一流の研究者がSVとして名をつらね、新しい学者を育てる、このような研究会の存在は、社会的に大きな意義があるものと思っています。

事務局のお働きにも感謝いたします。事務局の皆様には何度もご丁寧に、メールのやりとりをいただきまして、ありがとうございました。

まとまりのない感想ですが、感謝をこめて

#### ◇M-GTA 研究会第3回 合同研究会の開催

日時:2014年8月30日(土)・31日(日)

会場:熊本保健科学大学

\*参加者募集は終了しました。

#### ◇次回定例研究会の日程

\*11月頃開催予定

\*日程・場所が決まり次第、メーリングリストで、発表者の募集をいたします。

◇編集後記

今回の修論発表会は、とても充実したものとなりました。発表者の方々の日ごろの勤勉さと、研究に対する情熱が感じられたと思います。研究会で発表することは、皆さんそれぞれの研究にとって、とても有意義だと思っています。SV や会場の方々から、自分が気づかなかったいろいろなご意見をいただけます。NL を読んだり、会場で、他の方の発表を聞くだけではなく、ご自分の研究をぜひ、発表してください。M-GTA 研究会を活用して、より良い研究成果を出されることを祈っております。  
(林)